西都市埋蔵文化財発掘調査報告書24集

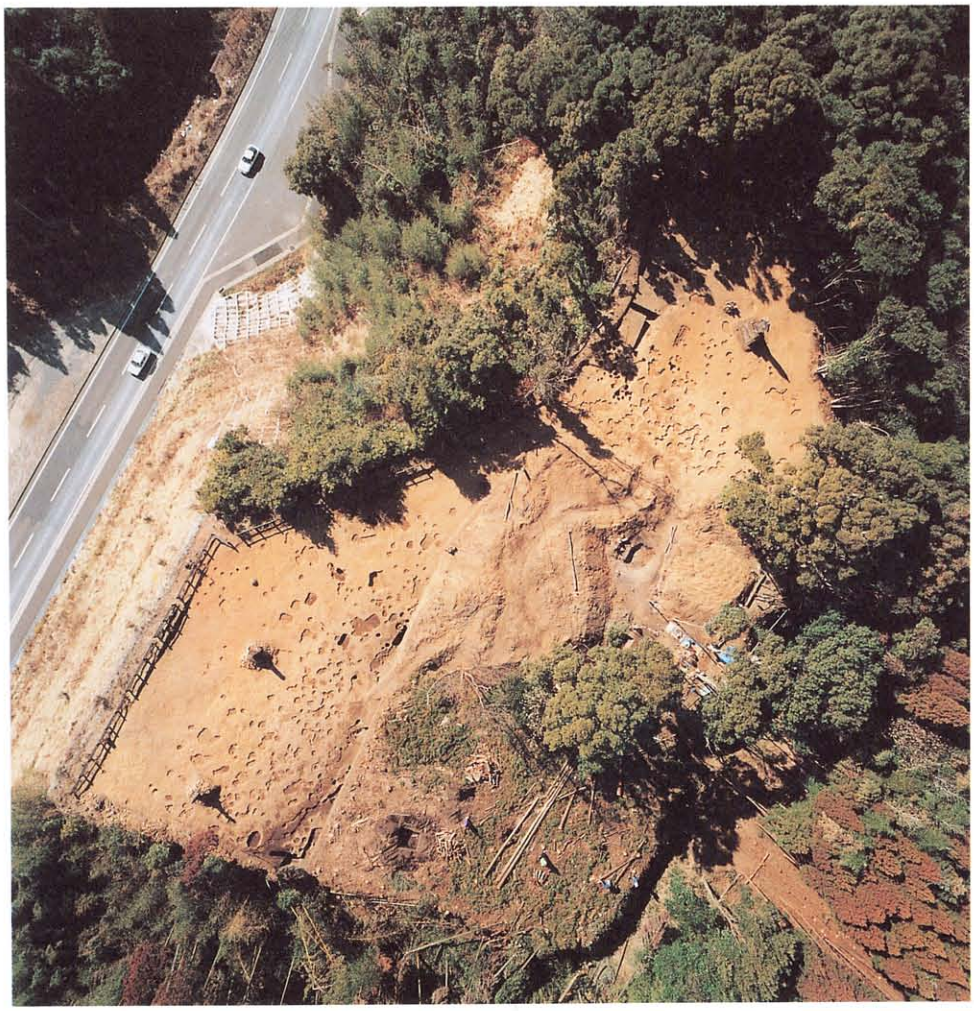
三納城跡
穂北城跡

平成6・7年度県営農村広域生活環境整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

1996·3

宮崎県·西都市教育委員会

三納城跡（北側から）



穂北城跡発掘調査区（真上から）

序

西都市教育委員会では、宮崎県児湯農林振興局の依頼を受け、県営農村広域生活環境整備事業に伴う三納城跡と穂北城跡の発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査結果の報告であります。

今回の調査では、いずれの城跡からも築城時のものと思われる虎口をはじめ掘立柱建物跡及びピット群などが検出されました。また、これら遺構に伴い土師質土器をはじめ青白磁・三彩盤などの輸入陶磁器、そして、「元祐通宝」「大中通宝」などの輸入銭や「仙台通宝」など市内では初めてとなる貴重な遺物も出土しました。さらに、穂北城跡では縄文時代前期及び弥生時代後期の遺物も出土し、古い時代から生活の適地として営まれていたことが確認されました。

いずれにしても、城跡の性格・機能を考えるうえでは極めて重要な遺構・遺物の検出であり、大きな成果をあげることができました。

本報告が、専門の研究だけでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を得るための資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってご指導とご理解をいただいた宮崎県教育庁文化課・宮崎県児湯農林振興局をはじめ発掘調査にご協力いただいた地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成８年３月15日

西都市教育委員会
教育長　平野　平

例　言

1．本書は、平成６・７年度県営農村広域生活環境整備事業西都地区平城工区及び上野工区に伴い実施した三納城跡・穂北城跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、宮崎県児湯農林振興局の委託を受けて、西都市教育委員会が主体となり実施した。

3．発掘調査は、平成６年度が社会教育課主事蓑方政幾、平成７年度が蓑方と同主事補岩田陽子が担当し、図面の作成については蓑方と岩田が行った。

4．遺物の実測・拓本・トレースは調査員のほか、整理作業員の協力を得て行った。

5．本書に使用した方位は座標北・磁北で、レベルは海抜絶対高である。

6．本書に使用した空中写真は㈱スカイサーベイに委託した。

7．本書は第Ⅱ章第４節・第Ⅲ章第４節を日高正晴、その他を蓑方が執筆し、編集は蓑方が行った。

8．調査で出土した遺物は、西都市歴史民俗資料館において保管している。

目　次

第Ⅰ章．はじめに…… 1
第１節．調査に至る経緯…… 1
第２節．調査の体制…… 1
第Ⅱ章．三納城跡…… 3
第１節．遺跡の位置と歴史的環境…… 3
第２節．三納城跡の縄張り…… 3
第３節．調査の記録…… 6
１．平成６年度の調査…… 6
２．平成７年度の調査…… 6
遺構…… 6
遺物……10
第４節．まとめ……23
第Ⅲ章．穂北城跡……31
第１節．遺跡の位置と歴史的環境……31
第２節．穂北城跡の縄張り……31
第３節．調査の記録……35
1.遺構……35
2.遺物……36
第４節．まとめ……51

挿　図　目　次

三納城跡

第１図　遺跡位置図…… 4
第２図　三納城跡縄張り図…… 5
第３図　平城(追手口)周辺調査区位置図……7～8
第４図　平城C区遺跡分布図…… 9
第５図　第1.2トレンチ土層実測図…… 9
第６図　三納城跡実測図及び調査区位置図……11～12
第７図　北側調査区遺構分布図……13～14

第８図　虎口実測図及び周辺コンタ……15
第９図　1号～5号土坑実測図……16
第10図　出土遺物実測図(土師質土器)……18
第11図　出土遺物実測図(須恵器・青磁・白磁・染付・陶磁器)……19
第12図　出土遺物実測図(土錘・古銭)……20
穂北城跡
第13図　遺跡位置図……32
第14図　穂北城縄張り図……33
第15図　穂北城跡調査区位置図……37～38
第16図　南側調査区遺構分布図……39
第17図　西側調査区遺構分布図……40
第18図　西側調査区虎口周辺遺構分布図……41
第19図　土坑実測図及び駐車場部分遺構分布図……43
第20図　出土遺物実測図(縄文土器・弥生土器)……44
第21図　出土遺物実測図(弥生土器・杓子)……45
第22図　出土遺物実測図(土師質土器・三彩盤・染付・青磁)……46
第23図　出土遺物実測図(染付・陶磁器・古銭)……47
第24図　出土遺物実測図(土錘・石鏃・石包丁・石斧)……48

表　目　次

三納城跡
遺物観察表(1)……21
遺物観察表(2)……22
穂北城跡
遺物観察表(1)……49
遺物観察表(2)……50

第Ⅰ章．はじめに

第1節．調査に至る経緯

宮崎県児湯農林振興局では、県営農村広域生活環境整備事業の一貫として、城跡の公園整備事業が計画され、本年度、三納城跡と穂北城跡が対象となった。

整備内容には、道路拡幅及び駐車場の整備と曲輪の外柵設置・張芝工事などが含まれていたが、当該工事によって地下遺構等に影響を及ぼすと考えられることから、児湯農林振興局、県文化課、市教育委員会の三者にて埋蔵文化財の取り扱いについて協議がもたれた。協議の結果、①工事は芝張りが目的であり、造成については地下遺構に影響を及ぼさないよう軽微なものにすること。②現地形を変えないように配慮すること。③樹木の伐根は人力で行うこと。④遺構検出面が浅く、樹木等の伐根によって地下遺構に影響を及ぼす場合には遺構確認のための発掘調査を実施することで合意に達し、児湯農林振興局の委託を受けて、西都市教育委員会が主体となり発掘調査を実施した。

発掘調査は、まず、試掘調査を実施し、遺構検出面が深く、工事によって地下遺構に影響を及ぼさないと判断された部分については調査対象から除外した。結果、三納城跡では道路拡幅部分と駐車場が全面、曲輪が北側半分、穂北城跡では、曲輪の南側と西側が対象となった。

調査期間は、平成6年度の平城地区の道路拡幅部分が平成6年10月14日～平成6年10月31日、平成7年度の三納城跡が平成7年4月24日～平成7年7月10日、穂北城跡が平成7年10月18日～平成8年2月22日である。

第2節．調査の体制

平成6年度〈平城集落道路拡幅工事〉

調査主体　西都市教育委員会

	教育長	平野　平
	社会教育課長	三輪公洋
	同文化財係長	伊達博敏
	同文化財主事補	鹿嶋修一
調査員	調査指導	日高正晴（西都遺跡研究所長）
	社会教育課主事	蓑方政幾

発掘調査作業員

緒方タケ子・長谷川クミエ・藤原秋子・黒木トシ子・緒方シヅエ・川崎ヒロ子

平成7年度〈三納城跡・穂北城跡〉

調査主体　西都市教育委員会

	教育長	平野　平
	社会教育課長	三輪公洋
	同文化財係長	伊達博敏
	同文化財主事	鹿嶋修一
調査員	社会教育課主事	蓑方政幾
	〃　主事補	岩田陽子

発掘調査作業員

椎葉重満・椎葉智佐子・篠原時江・黒木トシ子・緒方タケ子

長谷川クミエ・藤原秋子・川崎ヒロ子・緒方シヅエ・押川ツル・押川美歌子

佐伯民孝・杉田ヨシ・横山ヨシ・横山ナオ子・川野照夫・河野達也

遺物整理作業員

蓑方玉江・片岡紀子

第Ⅱ章. 三　納　城　跡

第１節. 遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地のほぼ西方5.4㌔、九州山地が南に延びた、標高87㍍の断崖台地上に位置している。西方は断崖絶壁で三納川が南流し、東方は渓谷、北方は馬背稜線が続いて山地に接する堅固な構えである。南方には曲折登板の追手口を配し、その眼下には三納の町並みを有する三納平野が広がっている。

地形的には、南側の追手口を登ると微高地になり、この微高地には古寺跡や屋敷割り跡が感じられ、その北方の高台に本拠城を構えている。高台の入口には、傾斜地の防備施設としての濠跡が確認される。

築造年代は定かではないが、日向記による伊東氏48城跡に含まれ、飯田肥前守が城主とあり、天正５年（1577）伊東氏豊後落ちのあと、最後の砦となって、島津氏と対決した有名な城である。

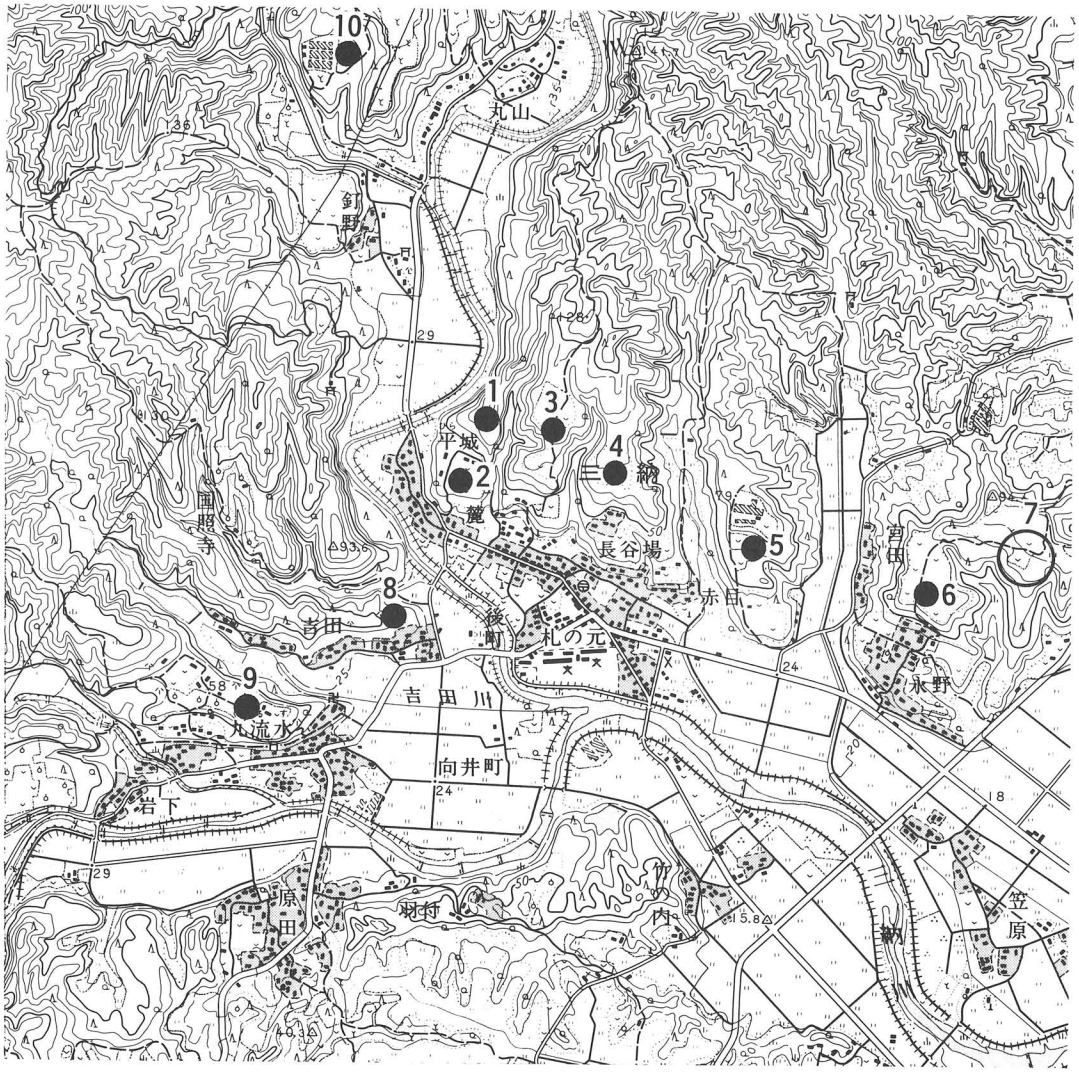
現在は、回りを樹木に囲まれ、眺望がほとんどきかなくなっているが、南南東7.0㌔には主城である**都於郡城跡**が確認できる。

また、三財川を隔てた対岸台地先端には**吉田遺跡**、東側対岸台地上には**法蓮寺遺跡**が位置している。

第２節. 三納城跡の縄張り（第２図）

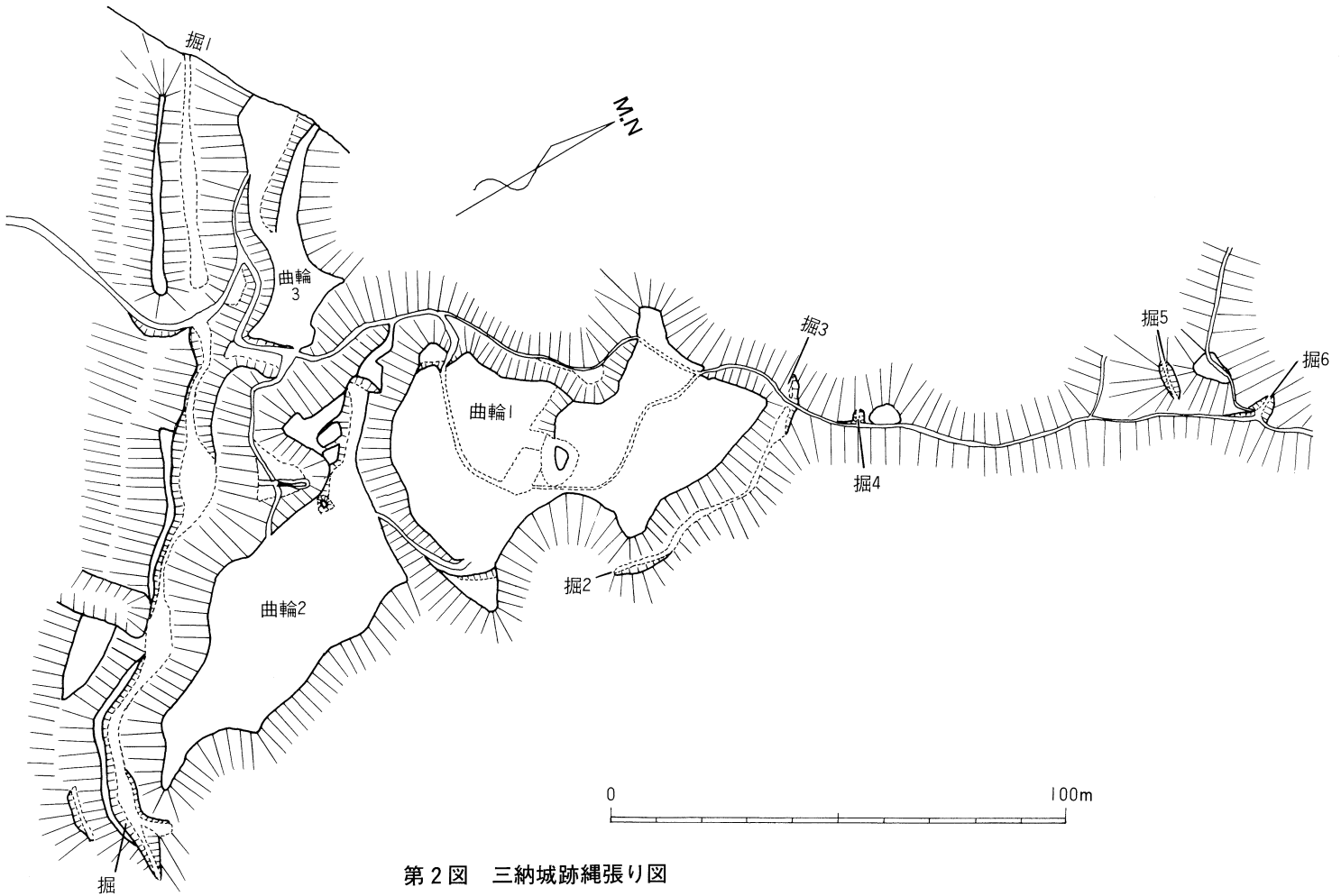
三納城跡は、自然の地形を有効に利用した３区画の曲輪から構成されている。主郭（本城）と見られる曲輪は、最頂部北端に位置する曲輪で、ここでは１の曲輪とする。この曲輪からは、今回の調査で西側中央部の括れた位置（第７図）から虎口が確認された。虎口は、２～３回造り変えられていることから、ある一定期間利用されていたものと思われる。土塁については、地元の方によると存在していたとの話であるが、現在ではまったく確認できない。また、虎口が確認された西辺中央部の北側は細長く突出しており、櫓台としての役割が想定される。この曲輪の北方は、地形的に馬背状の断崖絶壁になっていることから、北側からの侵入を防ぐ役目を果たしているが、さらに、その区間に４つの堀が連続して配置されており、防御がより堅固なものになっている。なお、１の曲輪の中央部分には段差がついており、２つの曲輪で構成されている可能性も残される。

１の曲輪の南側には２の曲輪と３の曲輪が相対して位置している。２の曲輪は、南方へ舌状に延びたもので、土塁は見られない。３の曲輪は２の曲輪の西側に位置している。規模的には小さく、東西に延びた曲輪で、西側は２段になっている。この２・３の曲輪の南側には、



1．三納城跡 2．平城遺跡 3．法連寺遺跡 4．長谷場遺跡 5．鴨目原遺跡 6．長野原遺跡
7．三納古墳群（百塚原古墳群） 8．吉田遺跡 9．上九流水遺跡10．内久野遺跡

第１図　遺跡位置図



第２図　三納城跡縄張り図

大濠が東西に延びている。特に２の曲輪の南側部分は、最大幅が16.2m・深さが約13mにもなっており、南方に対する防御がこの大濠によってより堅固なものになっている。

第３節．調査の記録

１．平成６年度の調査（第３・４図）

本年度は、三納城の入口周辺で、平城集落中央部に位置する南北に延びた道路と駐車場の整備が実施されることとなったことから、調査の対象となった。

調査は、道路部分については現状の地形を堀切って造られており、遺構等は遺存していないと考えられることから、道路拡幅部分にあたるＡ地点からＤ地点と駐車場予定地を行った。

調査の結果、Ａ地点からピット、Ｃ地点から溝状遺構とピット、駐車場予定地からピットなどが検出されたが、狭範囲の調査であることから不明な点が多く、使用目的等は判断が難しい。遺物は、中近世の陶磁器などがＢ区・Ｃ区・Ｅ区から少量出土した。

２．平成７年度の調査

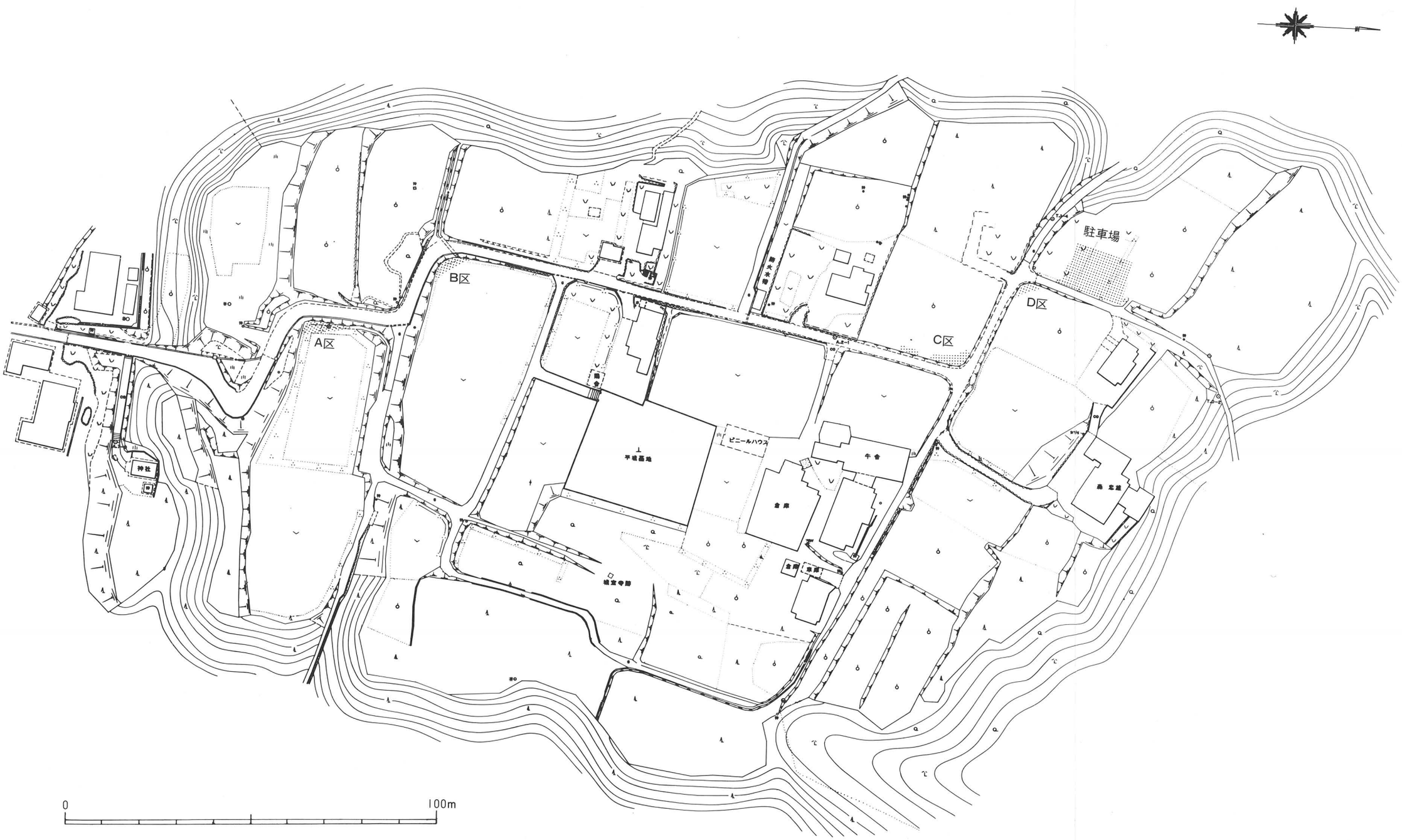
遺　構（第５～10図）

調査は１の曲輪を中心に行ったが、試掘調査の結果、南側半分については遺構検出面が深く、また、樹木も現状のまま生かして整備されることになり、工事によって地下遺構等に影響を及ぼさないと考えられることから、北側半分のみが調査対象となった。

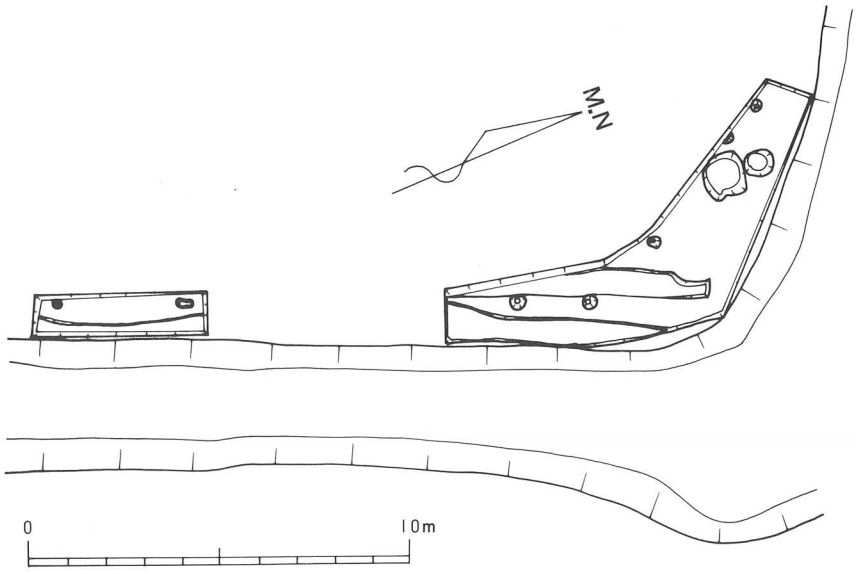
調査の結果、虎口をはじめ土坑及び掘立柱建物跡を含む多数のピットが検出された。このなかで、注目されるのは西辺中央部Ｃ－５グリット周辺から検出された虎口で、城の機能を考えるうえには重重な遺構である。第１虎口は、階段状になっているもので、両サイドに排水用と思われる溝を配している。現存長2.90m・最大幅2.45m・深さ（最深部）0.89mの規模を有するもので、その他の虎口に比べて丁寧に造られている。第２虎口と重複しているが、セクションで見ると第１虎口を第２虎口が切っていることから、第１虎口のほうが古く、築城時のものである可能性が強い。（第７・８図）

第２虎口は第１虎口の北側に隣接したもので、「Ｙ」字状になっているものと思われたが、虎口から検出された門柱のものと推定されるピットの配置などから判断すると、２つの虎口が重複している可能性が高く、本報告では第２虎口と第３虎口に分けて取り扱った。前後関係は不明。いずれも雑ではあるが、階段状になっており、第２虎口は現存長3.0m・最大幅2.5m・深さ（最深部）0.72m、第３虎口は現存長3.0m・最大幅2.5m・深さ（最深部）0.6mを計る。

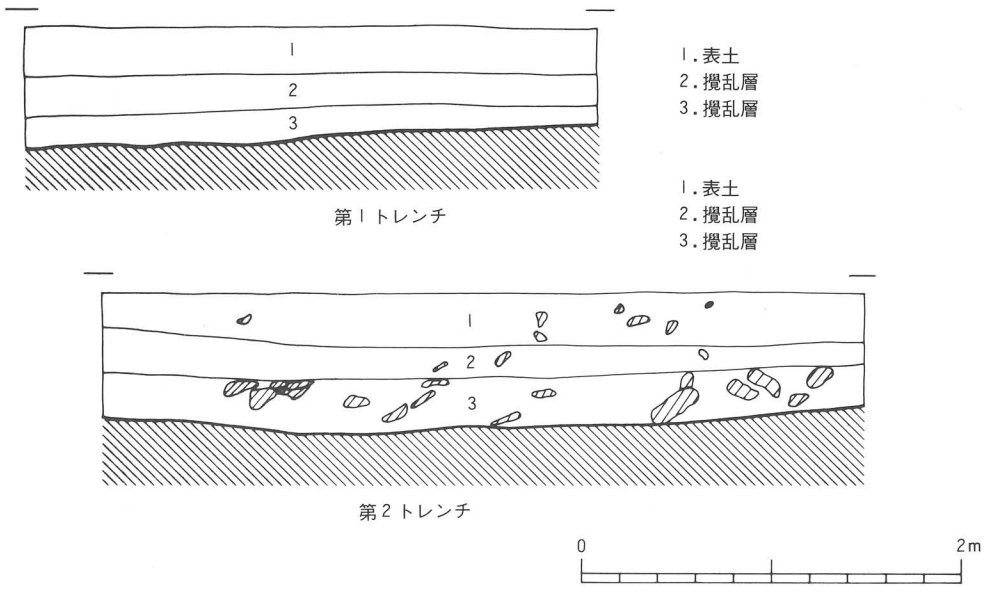
第４虎口は第３虎口の北側2.25m、Ｃ－６グリットに位置している。「Ｕ」字状に屈曲した



第3図　平城(追手口)周辺調査区位置図(S=1/1200)



第4図　平城C区遺跡分布図(S=1/200)



第5図　曲輪1南側第1.2トレンチ土層実測図(S=1/40)

虎口で、階段状になっている。現存長4.0m・最大幅2.8m・深さ（最深部）1.61mを計る。

土坑は、方形・長方形・円形プランのものが、北東部を中心に7基検出している。使用目的等は不明である。（第9図）

掘立柱建物跡は2棟検出された。1号掘立柱建物跡はD－5.6グリット、主軸の方向はW－15°－Nで、桁行（EW）6.1m・梁行（NS）2.1mを計る。柱穴はすべて円形で、柱間1.9～2.2m、径0.4～0.5mを計る。2号掘立柱建物跡はD－7グリット、N－17°－E、桁行（EW）6.2m・梁行（NS）4.0mを計る。柱穴はすべて円形で、柱間2.0m前後、径0.3～0.4mを計る。

ピットは、全面から検出されている。円形のものがほとんどで、径0.3～0.7mを計る。このピット群は、何回となく建物が建替えられたことを物語っているが、掘立柱建物跡2棟以外に建物跡を復元することはできなかった。

溝状遺構は北東端、現存長約17m、幅2.0m・深さ0.1mを計る。遺構の検出状況などから後世のものと推定される。

遺　物（第10～12図）

遺物は、青磁・白磁などの輸入陶磁器類や国産陶磁器をはじめ土師質土器などが出土しているが、最も多いのは土師質土器で、全体の46％を占めている。そのほか、土錘・古銭などが出土しているが、特に土錘が多いのが目に付く。

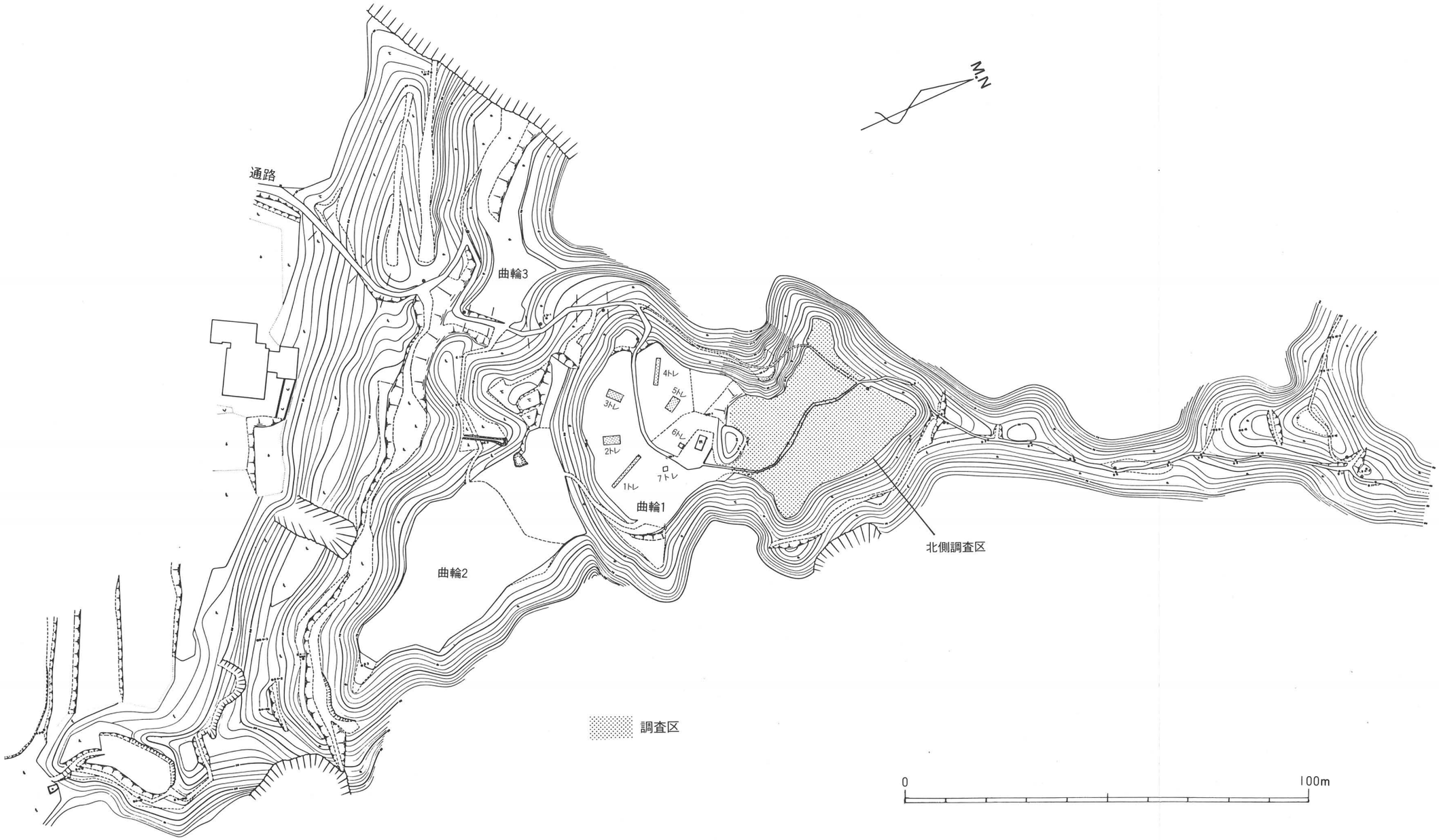
なお、これら土器の詳細については、観察表を参考にしていただきたい。

土師質土器（第10図1～35）

土師質土器は、皿と坏（1～35）のみで、そのほとんどが皿である。いずれもヘラ切り底で、底部と体部の境に段を有しているもの（6・9・13）も含まれている。また、体部は直線的に立ち上がるものがほとんどであるが、なかには外反するもの（1・11・30）も含まれている。

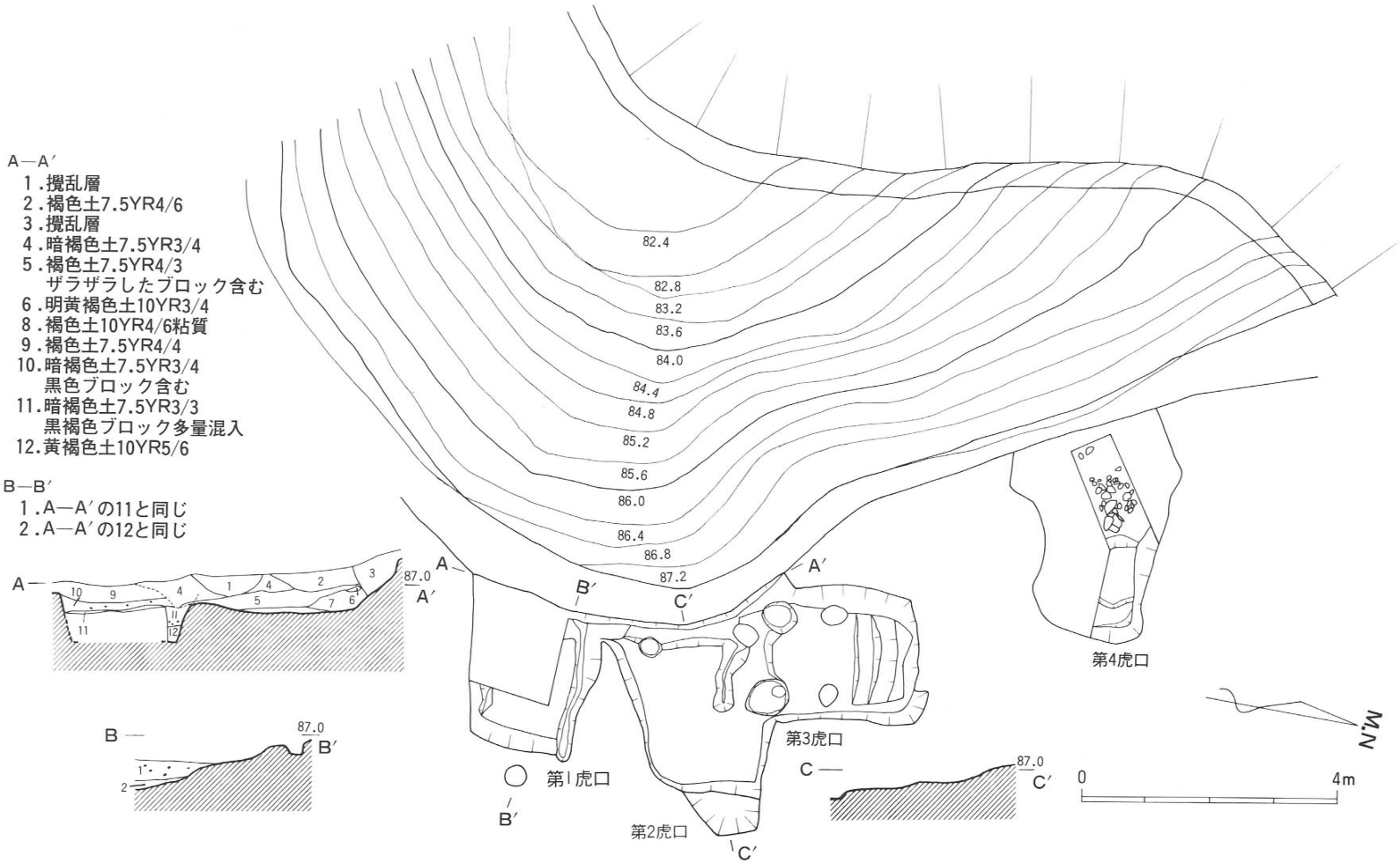
須恵器（第11図36・37）

36は壺と思われる胴部の破片で、外面は叩き後カキ目調整、内面には同心円文が施されている。37は鉢の口縁部で、端部が「L」字状に内傾している。

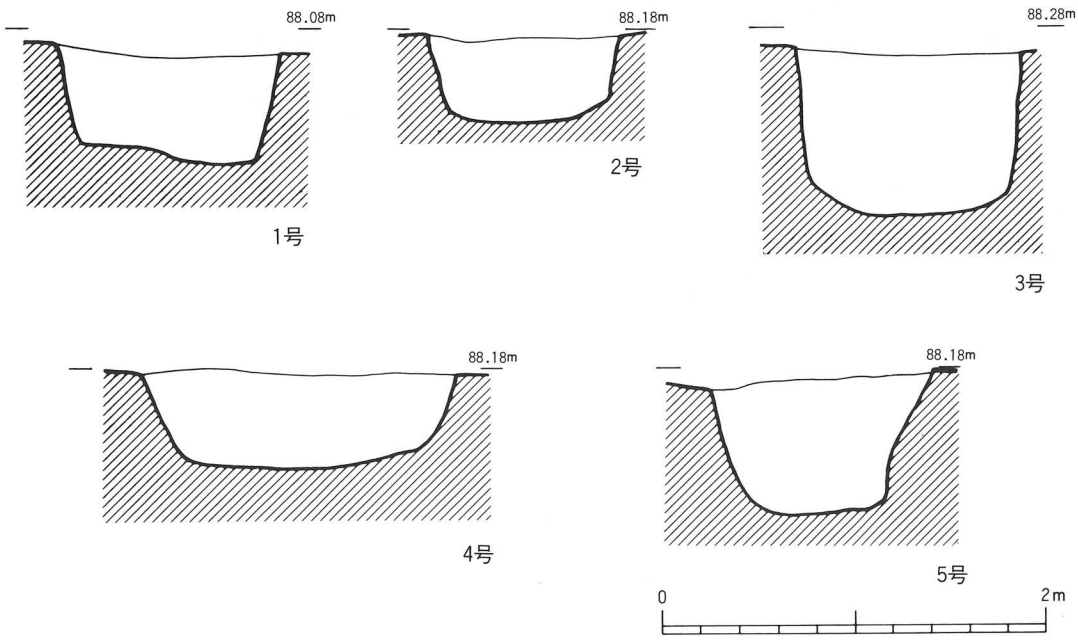


第 6 図　三納城跡実測図及び調査区位置図(S＝1/1200)

第７図　北側調査区遺構分布図(S＝1/200)



第8図　虎口実測図及び周辺コンタ



第9図　1号～5号土坑実測図(S=1/40)

青　磁（第11図38～46）

38～40・43・44は青磁碗の口縁部で、端反りのもの（39）も含まれている。38には草花文、40には連弁文が描かれている。41・42・46は端反りの小鉢で、41・46は同一個体で蓮華唐草文が描かれている。45は高台付碗の底部である。

白　磁（第11図48・49）

48は皿の底部、49は鉢の口縁部である。

染　付（第11図47・50～52）

47は端反りの鉢の口縁部で、唐草文が描かれている。50は端反りの皿で外面に花弁文、内面に蓮華文が描かれている。51は碗の口縁部で、松梅文が描かれている。52は端反りの鉢の口縁部で、花枝文が描かれている。

陶　器（第11図53～55）

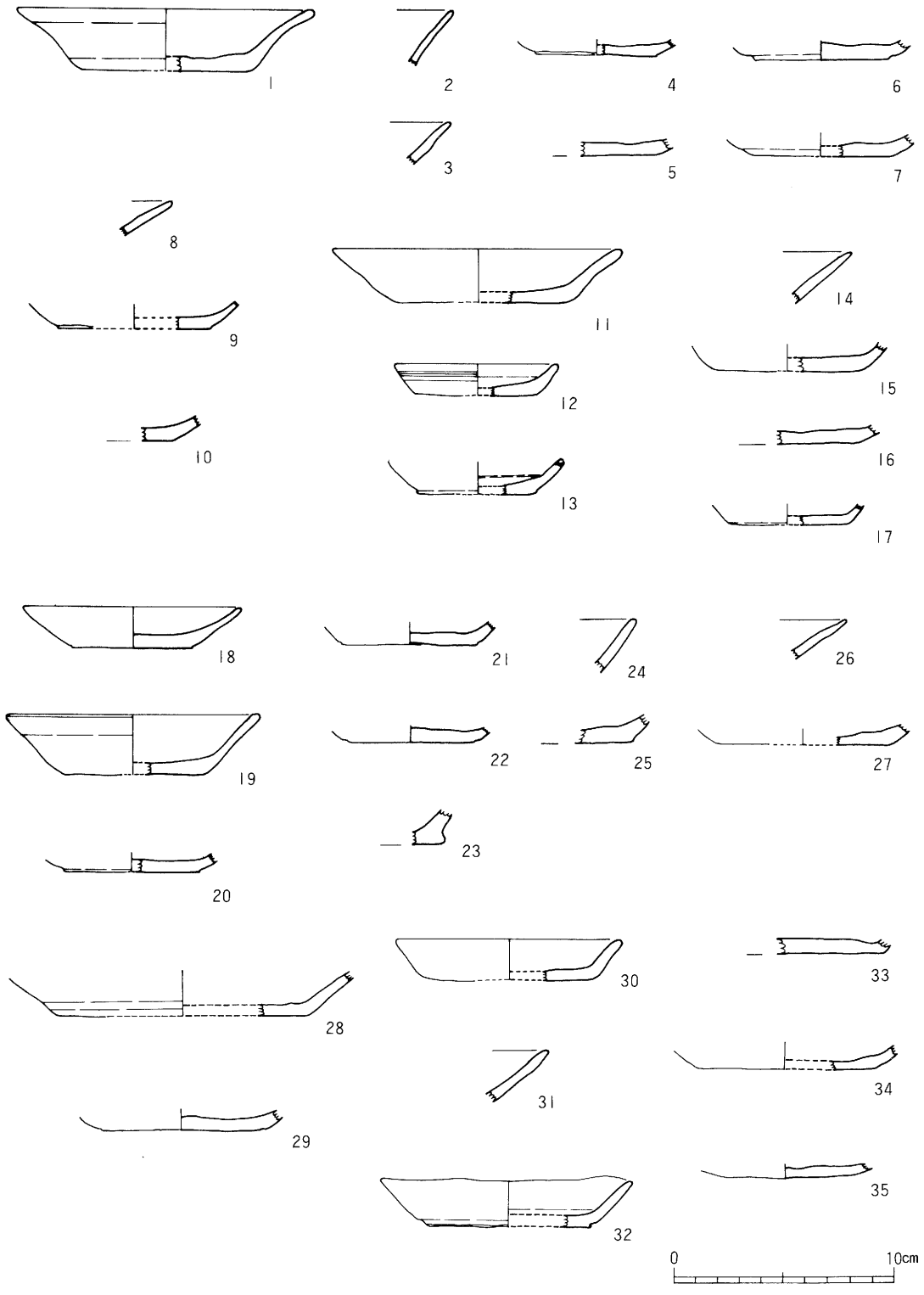
53は瓶の頸部、54は高台付鉢の底部である。55は口縁部に稜を持つ擂鉢の口縁部である。

土　錘（第12図56～89）

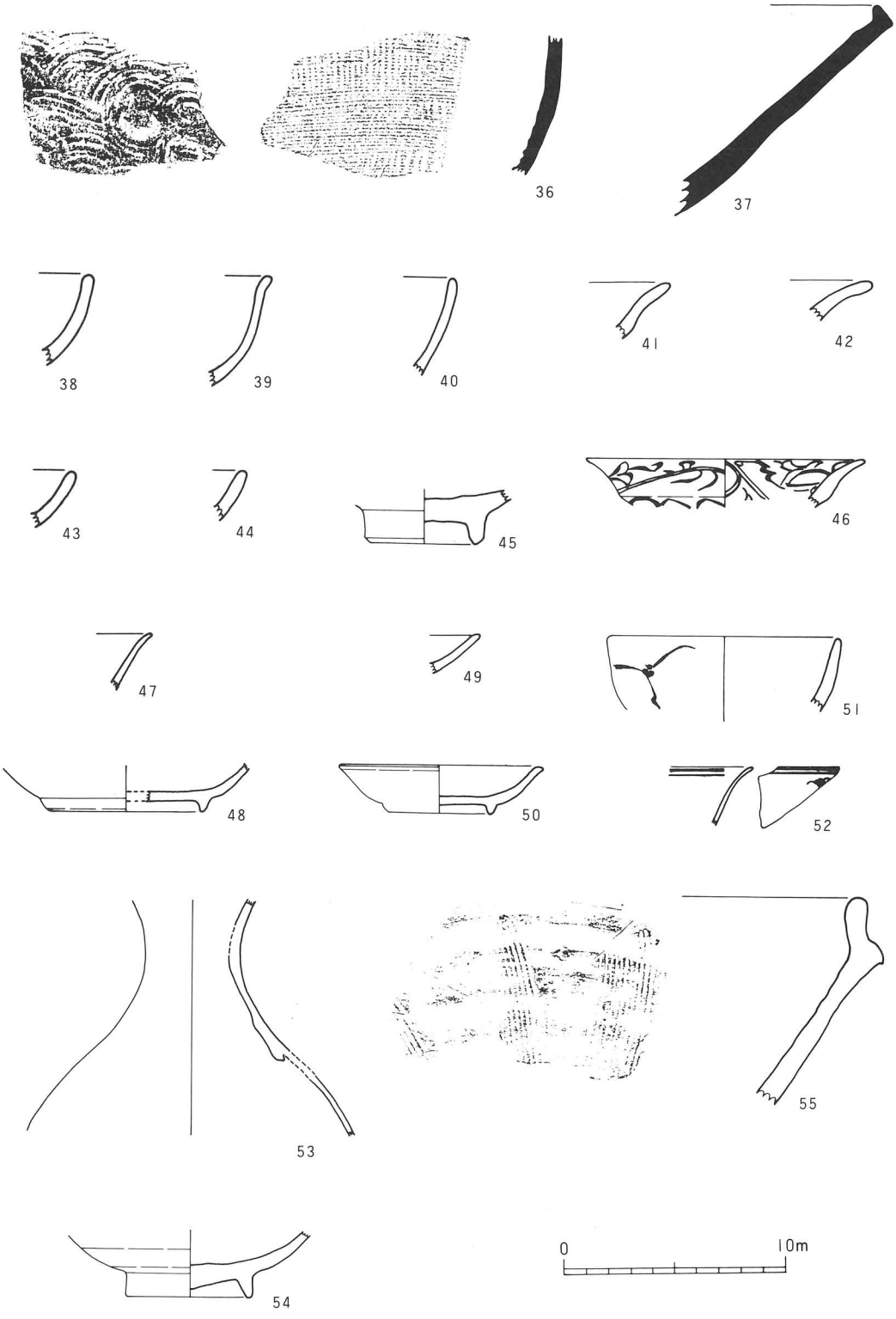
いずれも管状の土錘で、長さ3.0～5.3cm、最大幅1.0～1.8cm、孔径0.4cm前後を計る。胎土は細かく、焼成も良好である。

古　銭（第12図90～92）

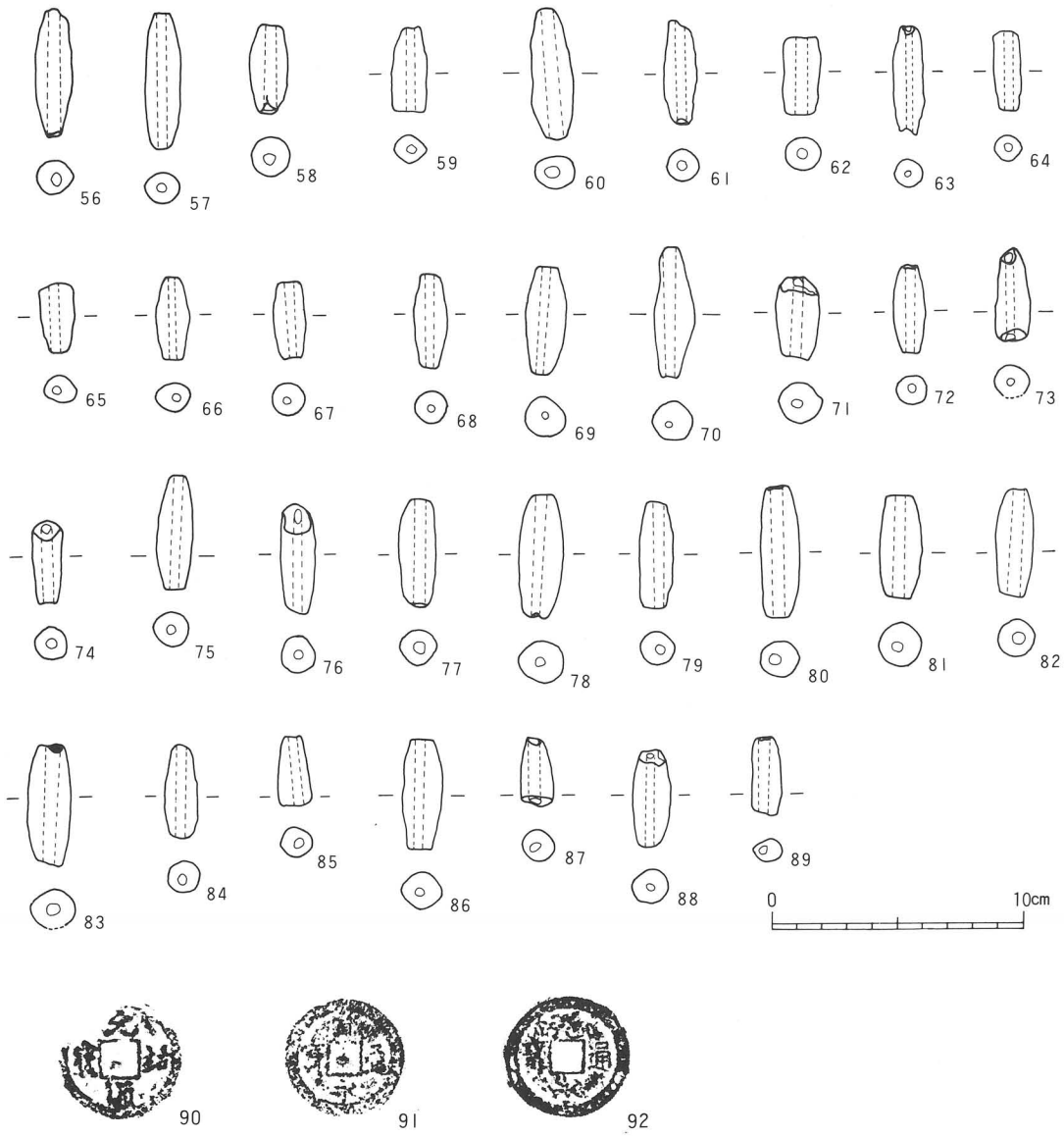
古銭は、中国からの輸入銭「元祐通宝」（1086）をはじめ「寛永通宝」「仙台通宝」が出土しているが、なかでも、「仙台通宝」は仙台藩にて鋳造されたと思われるもので、方形を呈している。この「仙台通宝」には母銭と使用銭があり、本城跡出土のものは使用銭の鉄銭である。なお、母銭の方形の大型銅銭で、天明年間に仙台藩で鋳造されている。いずれにしても、興味ある古銭であるが、腐食の度合が著しく掲載できなかったのが残念である。



第10図　出土遺物実測図(土師質土器)　(S＝1/3)



第11図　出土遺物実測図(須恵器・青磁・白磁・染付・陶磁器)　(S=1/3)



第12図　出土遺物実測図(土錘・古銭)　(S=56～89→1/3, 80～82→2/3)

遺物観察表 (1)

遺物番号	出土地点	種別	器種・部位	法量 (cm)			調整・手法ほか		色調		焼成	胎土の特徴
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	B-5・虎口西	土師質	Ⅲ・ほぼ完形品	13.3	7.4	2.9	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	やや不良	きめ細かい、1㎜以下の砂粒含
2	C-6・虎口付近	土師質	Ⅲ・口縁部	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	〃	〃	良好	〃
3	〃・〃	土師質	Ⅲ・口縁部	—	—	—	ヨコナデ	風化著しい	〃	〃	やや不良	〃
4	〃・〃	土師質	Ⅲ・底部	—	5.6	—	風化著しい、底部ヘラ切り	風化著しい、底部に穿孔	鈍い橙	鈍い橙	不良	〃
5	〃・〃	土師質	Ⅲ・底部	—	—	—	風化著しい、底部ヘラ切り	ナデ	〃	〃	やや不良	〃
6	C-5・虎口	土師質	Ⅲ・底部	—	6.0	—	風化、底部ヘラ切り未調整	風化著しい	灰黄褐	浅黄橙	〃	きめ細かい、1㎜以下の炭化粒
7	〃・〃	土師質	Ⅲ・底部	—	6.2	—	風化著しい	風化著しい、炭化物付着	浅黄橙	〃	〃	きめ細かい、1㎜以下の砂粒含
8	C-6・虎口付近	土師質	Ⅲ・口縁部	—	—	—	ヨコナデ、口縁部煤付着	ヨコナデ	〃	橙	〃	〃
9	〃・〃	土師質	Ⅲ・底部	—	7.0	—	ヨコナデ	ヨコナデ	〃	浅黄橙	〃	〃
10	〃・〃	土師質	Ⅲ・底部	—	—	—	ヨコナデ	風化著しい	〃	〃	〃	〃
11	B-6	土師質	Ⅲ・ほぼ完形品	13.2	7.0	2.5	風化著しい	風化著しい	黄橙	〃	〃	〃
12	〃	土師質	小皿・ほぼ完形品	7.5	5.4	1.5	風化著しい	風化著しい	橙	橙	不良	〃
13	〃	土師質	Ⅲ・底部付近	—	5.5	—	風化著しい	風化著しい	浅黄橙	浅黄橙	やや不良	〃
14	〃	土師質	Ⅲ・口縁部	—	—	—	風化著しい	風化著しい	橙	橙	〃	〃
15	〃	土師質	Ⅲ・底部	—	6.4	—	風化著しい	風化著しい	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃
16	〃	土師質	Ⅲ・底部	—	—	—	風化著しい	風化著しい	鈍い橙	鈍い橙	〃	〃
17	B-8	土師質	Ⅲ・底部	—	5.5	—	風化著しい	風化著しい	浅黄橙	橙	〃	〃
18	C-6	土師質	Ⅲ・完形品	9.9	5.4	1.9	ヨコナデ、底部ヘラ切り	ヨコナデ	鈍い橙	橙	良好	1㎜以下の炭化物粒含む
19	D-5・ピット	土師質	Ⅲ・完形品	11.4	6.3	2.8	風化著しい	風化著しい	橙	〃	〃	〃
20	D-6～7	土師質	Ⅲ・底部	—	6.0	—	風化著しい、底部ヘラ切り	風化著しい	橙	浅黄橙	不良	きめ細かい、1㎜以下の砂粒含
21	E-5・ピット	土師質	Ⅲ・底部	—	6.0	—	風化著しい	風化著しい	橙	橙	やや不良	2㎜以下の炭化物粒含む
22	〃・〃	土師質	Ⅲ・底部	—	5.8	—	風化著しい	風化著しい	浅黄橙	鈍い橙	〃	きめ細かい、1㎜以下の砂粒含
23	〃・〃	土師質	坏・底部	—	—	—	ヨコナデ	風化著しい	〃	〃	〃	〃
24	F-6	土師質	Ⅲ・口縁部	—	—	—	風化著しい	風化著しい	〃	浅黄橙	〃	〃
25	〃	土師質	Ⅲ・底部	—	—	—	風化著しい、底部ヘラ切り	ヨコナデ	鈍い橙	橙	〃	〃
26	第5トレンチ	土師質	Ⅲ・口縁部	—	—	—	風化著しい	風化著しい	浅黄橙	浅黄橙	やや不良	〃
27	〃	土師質	Ⅲ・底部	—	7.6	—	風化著しい	風化著しい	橙	橙	不良	〃
28	第6トレンチ	土師質	Ⅲ・底部付近	—	11.4	—	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	やや不良	〃

遺物観察表 (2)

遺物番号	出土地点	種別	器種・部位	法量 (cm)			調整・手法ほか		色調		焼成	胎土の特徴
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
29	第6トレンチ	土師質	皿・底部付近	—	7.2	—	風化著しい、底部ヘラ切り	風化著しい	鈍い橙	浅黄橙	やや不良	きめ細かい、1mm以下の砂粒含
30	一括	土師質	皿・口縁～底部	—	8.0	—	ヨコナデ、底部ヘラ切り	ヨコナデ、指圧痕	淡橙	淡橙	〃	1mm以下の炭化物粒含む
31	〃	土師質	皿・口縁部	—	—	2.0	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	橙	〃	〃
32	〃	土師質	皿・口縁～底部	—	7.2	2.2	ヨコナデ、底部ヘラ切り	ヨコナデ	〃	〃	良好	〃
33	〃	土師質	皿・底部	—	—	—	風化著しい	風化著しい	浅黄橙	浅黄橙	不良	きめ細かい、1mm以下の砂粒含
34	〃	土師質	皿・底部	—	8.0	—	ヨコナデ、底部ヘラ切り	ヨコナデ、内外面に煤付着	にぶい褐	橙	良好	〃
35	〃	土師質	皿・底部	—	4.6	—	風化著しい、底部ヘラ切り	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃
36	一括	須恵器	壺・胴部	—	—	—	タタキ、カキメ	同心円文	灰	灰	〃	きめ細かい、1mm以下の砂粒含
37	〃	須恵器	鉢・口縁部	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	〃	〃	〃	5mm程の小石を含む
38	C-5・虎口	青磁	碗・口縁部	—	—	—	口縁部に草花文有り					
39	〃・〃	青磁	碗・口縁部	—	—	—						
40	〃・〃	青磁	碗・口縁部	—	—	—	蓮弁文有り					
41	第2トレンチ	青磁	鉢・口縁部	—	—	—	蓮花唐草文有り	唐草文有り				
42	C-6	青磁	鉢・口縁部	—	—	—						
43	一括	青磁	碗・口縁部	—	—	—						
44	〃	青磁	碗・口縁部	—	—	—						
45	〃	青磁	？・底部	—	4.8	—	底中心部に花文有り					
46	B-6	青磁	鉢・口縁部	12.5	—	—	蓮花唐草文、41と同一個体	唐草文有り				
47	D-6～7	染付(青花)	鉢・口縁部	—	—	—	唐草文有り	草花文有り				
48	C-5・虎口	白磁	皿・底部	—	7.0	—						
49	D-6～7	白磁	鉢・口縁部	—	—	—						
50	C-6	染付(青花)	皿・ほぼ完形品	9.2	4.7	2.2	花弁文有り	蓮花文有り				
51	一括	染付(肥前)	碗・口縁～胴部	10.3	—	—	松梅文？有り					
52	D-6～7	染付(青花)	鉢・口縁～胴部	—	—	—	花枝文有り					
53	D-5	陶器	瓶・頸～胴部	—	—	—						
54	C-5・虎口	陶器	鉢・底部	—	5.6	—						
55	C-6・虎口	陶器	擂鉢・口縁部	—	—	—	備前焼					

第4節. ま と め

日 高 正 晴

この三納城については、『日向記』（1590年）および『日向纂記』（1867年）の中で「三納城主、飯田肥前守」として、48城の中の一城に取りあげられている。しかも、この両文献記事で興味あることは、本城としての都於郡城および佐土原城に次いで、最初に、この三納城が記されていることである。都於郡城の北西約4kmという地に相対して存在するという地理的条件が、その理由かもしれないが、さらに、三納城の西側は、すぐ約60㍍の断崖に沿って三納川が流れており、また、その清流の西側には、肥後国から日向国に通じる古道が通っていた。南北朝時代の正平13年（1358年）11月、肥後の宮方、菊池武光の軍勢が、米良山峡を越え、この古道を通って稗佐城を急襲したことがある。なお、この三納城のすぐ北の方には、この古道を利用して、名刹、初瀬山長谷寺も建立されている。

このようなことから考察すると、都於郡城の伊東氏にとって、三納城は、西国方面に対する防御的城塞としての意味を有していたので、筆頭に記載されていたのかもしれない。

ところで、この三納城については、文献史的見地から極めて注目すべきことがあるので、そのことについて以下、論及してみたいと思う。それは、『続日本紀』巻一の文武天皇3年（699年）12月の条に、「太宰府をして三野（みの）・稲積（いなつみ）の二城を修（つく）らしむ」という記事についてである。この記載に関して、三野城が、現在の児湯郡内の三納の地に存在したのではないかという説である。

この三納の地は、『倭名類聚鈔』巻九（938年）に、児湯郡の「三納郷」として記されており、そして、三納の東の方には、日向国を統轄した日向国衙も西都原古墳群地帯の三宅地方に設置された。それで、三納の地は、古墳時代から律令時代にかけての日向における政治的本拠地の、すぐ背後の地ということになる。

このことに関して元筑波大学教授の井上辰雄氏は、その著書、『隼人と大和政権』の中で、「三野城は、『和名抄』にいう日向国児湯郡三納郷に、稲積城が大隅国桑原郡稲積郷に存在したことが事実ならば、三野城が日向国衙の守護を目的とした城塞であることはいうまでもない」と記されている。

しかし、『続日本紀』に見られる三野城が、果たして、日向国に関連があるのかどうかについては、これまでに、その山城跡に関わりがありそうな資料が、全く発見されていないので何ともいえないけれども、三野城が記録されている『続紀』文武條の一年前の文武天皇2年5月の記事には、「太宰府をして大野・基肄（きい）・鞠智（くくち）の三城を繕治（つくろ）はしむ」とあることにより、もし、三野・稲積の二城を南九州の地に比定することになると、『続日本紀』所載の五山城は、

九州の防衛の拠点として、筑前、筑後、肥後の三城と九州東南部、大隅、日向の拠点として、存在したのかもしれないと思われるが、現在までのところ、奈良時代初頭前後ごろから律令期にかけての遺構、遺物らしきものは認められていない。

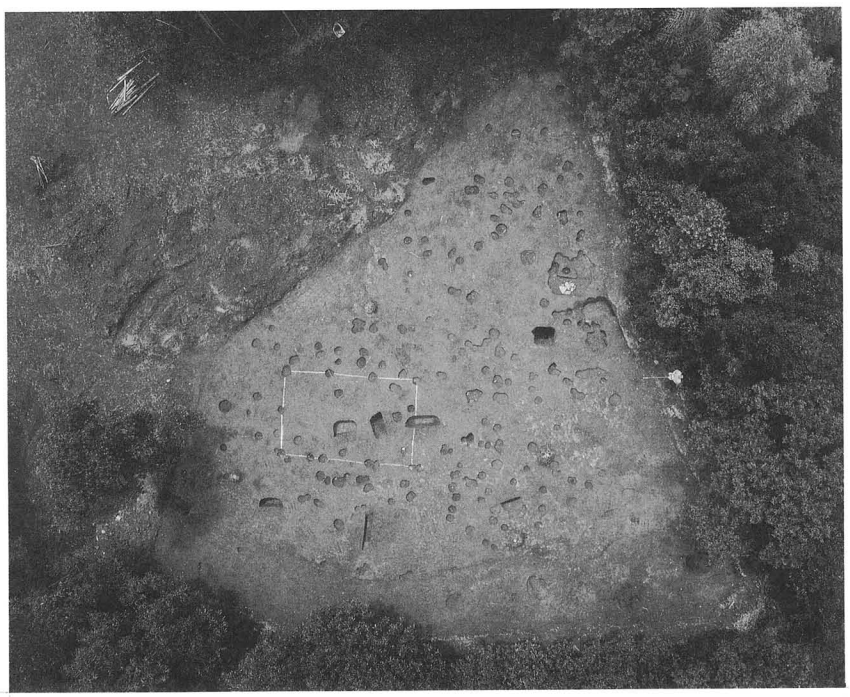
そこで、今回行われた三納城跡の発掘調査において、その遺構および出土遺物などで、律令前期ごろに関連のあるようなものはないか調べてみたが、その中で、時代的に多少とも関わりがあると推定されるものとしては、須恵器があげられる。この須恵器小片は、9点出土しているが、その中には、退化した青海波文をもつ須恵器片が3点含まれていた。しかし、それだけでは、この三野城に関連があるかどうか明らかにすることはできないけれども、記録によると、奈良時代直前の文武天皇3年には、すでに、三野城が、存在していたことになり、その意味では、興味深い資料と思われる。

また、発掘調査した曲輪1の北地区から北の方に、尾根状稜線が続いており、その諸所に小堀が造られているが、これは中世三納城跡に伴うものとされている。

しかし、この一帯には、稜線を伴う尾根状丘陵が広く存在しているので、さらに現地踏査を行って三野城に関わりがあるような保塁状遺構などの存在の有無について究めてゆきたいと思う。

図 版1

三納城跡（真上）



北側調査区遺構分布状況

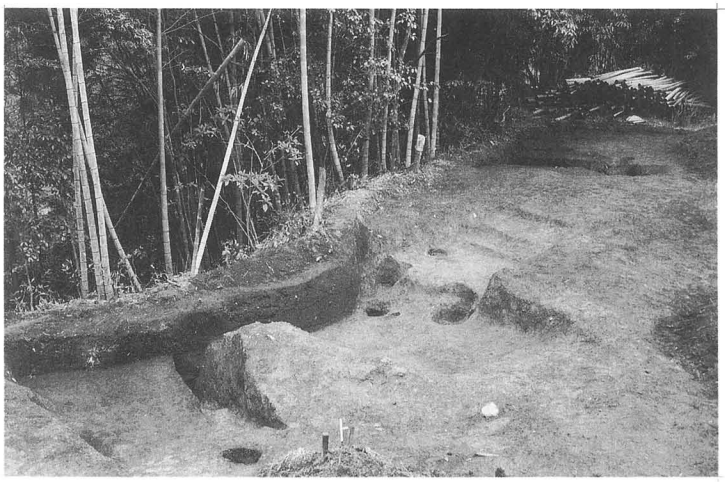
図 版 2

入口南側付近トレンチ内遺構分布状況

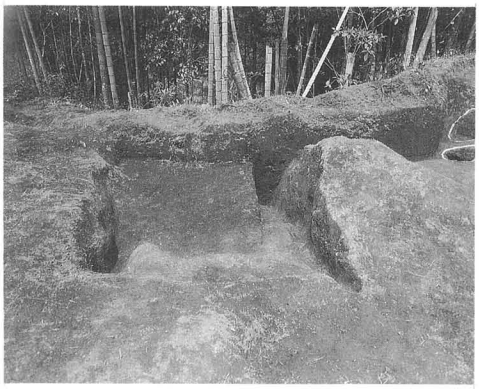
南側入口付近トレンチ内柱穴

北側調査区中央部遺構分布状況

図 版 3

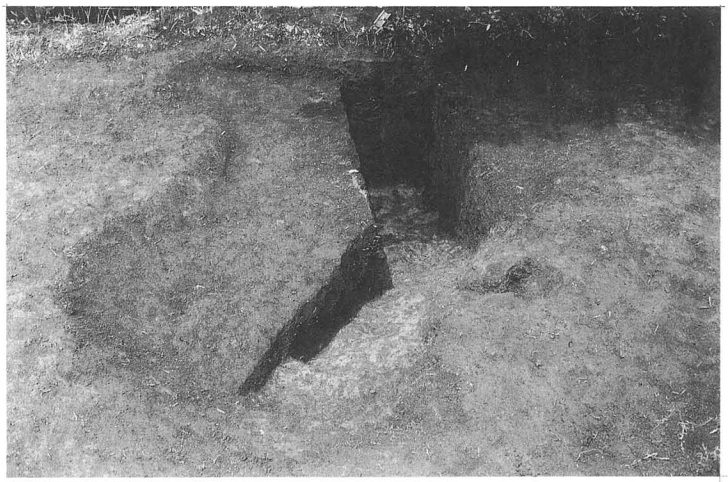


第 1 虎口～第 3 虎口検出状況



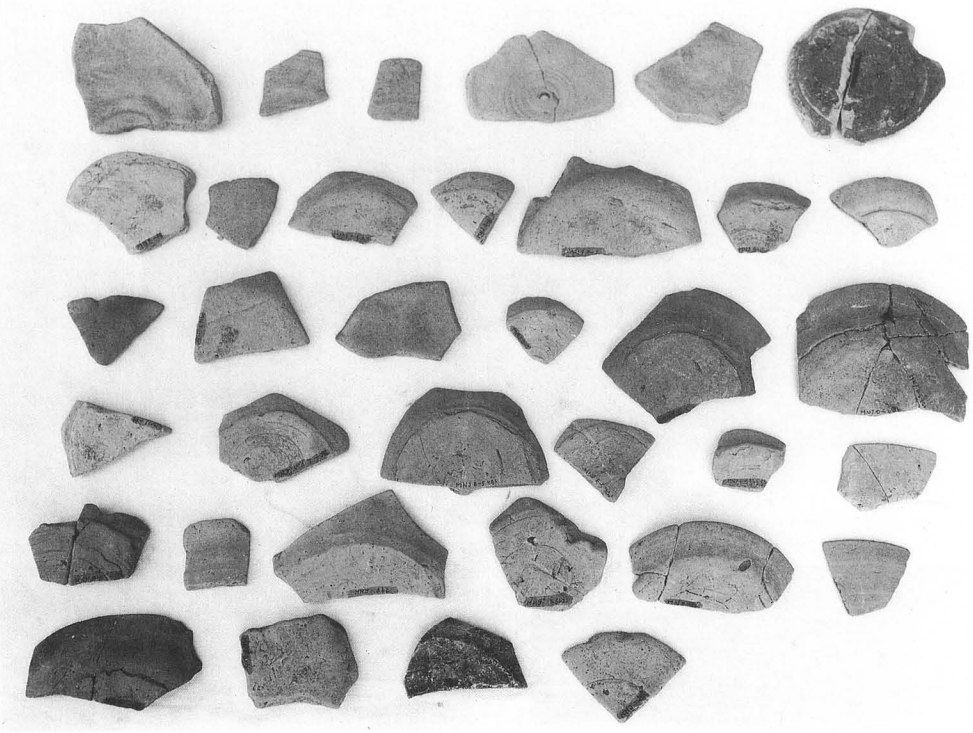
第 1 虎口

第2・3虎口



第 4 虎口

図 版 4



出土土器（土師質土器）

出土遺物（須恵器・青磁）

出土土器（染付・陶磁器）

土　錘

図 版 6

古　銭

第Ⅲ章. 穂　北　城　跡

第１節. 遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地のほぼ西方4.0㌔、標高120～130㍍の茶臼原台地西端に位置している。

茶臼原台地上には、前方後円墳３基・円墳52基で構成された国指定・茶臼原古墳群が分布し、なかでも首長墓とみられる**児屋根塚古墳**は全長110㍍、盾型の周堀を有する前方後円墳で、青竜・白虎及び24文字が浮彫りされた青銅製の四獣鏡や蛇行剣が出土している。

台地南側斜面には横穴式石室を有する**国指定・千畑古墳**や**千畑横穴墓群**・**囲横穴墓**をはじめ数十基の横穴墓群が群在している。

眼下には穂北平野が広がり、その北部を一ツ瀬川が東流し、豊かな水田地帯を潤している。また、この一ツ瀬川の対岸には**特別史跡・西都原古墳群**の分布する西都原台地を望むことができる。

築造年代は定かではないが、都於郡伊東氏48城跡の１つとして伝えられている城で、南方10㌔には主城である**都於郡城跡**を眺望することができる。

第２節. 穂北城跡の縄張り（第14図）

穂北城跡の縄張りについては、『日向地誌』（1929）のなかで次のように記載されている。

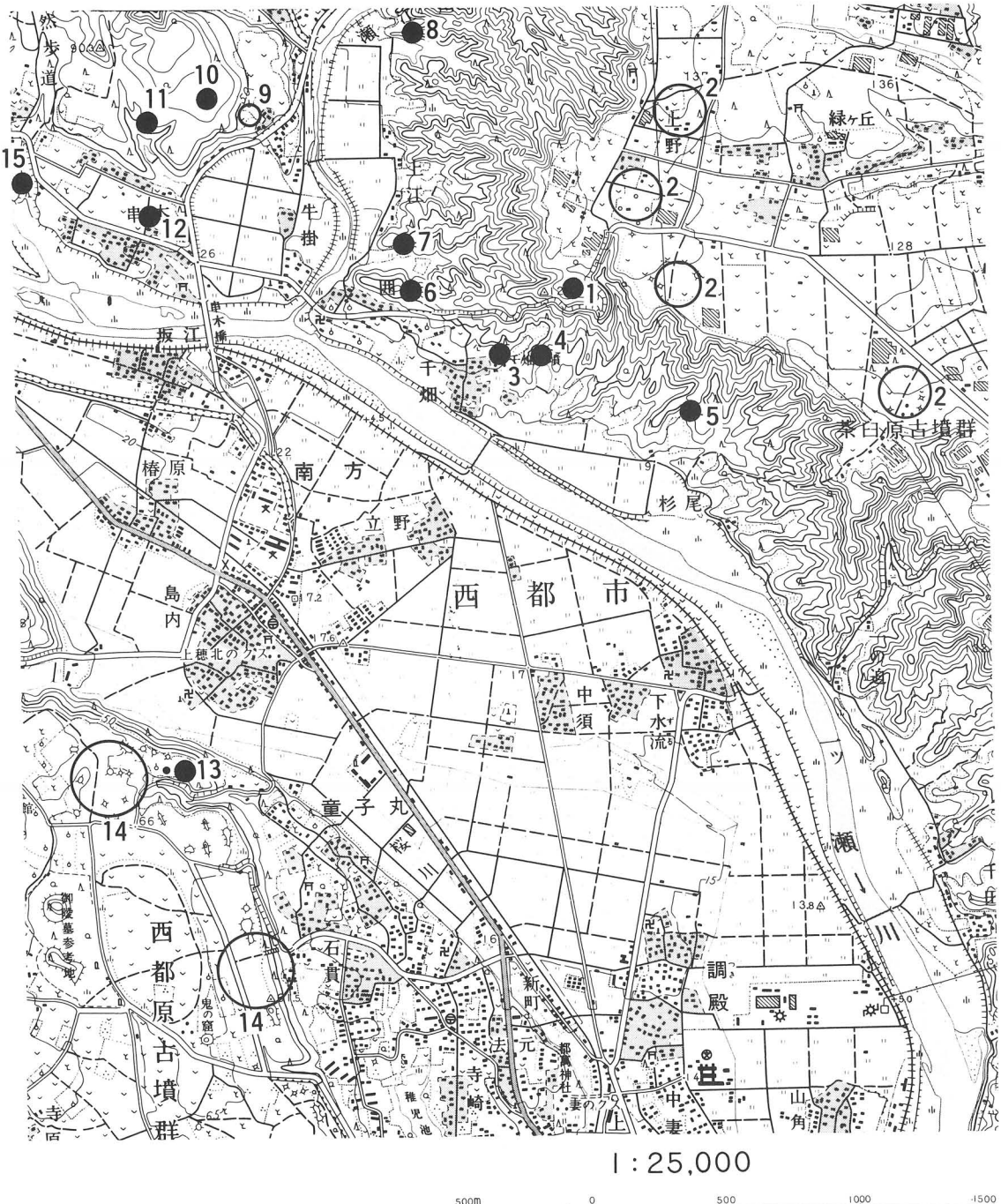
「南ハ穂北川ニ臨ミ断崖二十余丈東北ハ渓谷ヲ帯ヒ唯北一隅平原ニ接ス城上割テ三区トナル其南ナルヲ榎ノ木城ト呼フ東西二十八間南北十九間中ナルヲ中ノ城ト呼フ東西三十八間南北十九間其東ナルヲ東ノ城ト呼フ方十二三間三城ノ間皆壕隍ヲ通シテ要害ヲ固フス－以下略－」

また、『宮崎縣史蹟調査報告』第５輯（1930）の兒湯郡之部においても

「同村字千田の上丘に在、断崖一垂、高七十米、東、南、西の三面は穂北川其城脚を洗ひ、北方新田原の高原に接続せる地に、壕隍を穿ち、城域別つて三割となし、南端に在るを榎城と呼ふ、東西二十八間余、南北十九間余、中間に介在するもの中の城と称し、東西三十八間、南北二十間、其東方に在るもの東城と名く、方郭にして十三間、各城間に隍を設けて、各境割をなしてある。－以下略－」

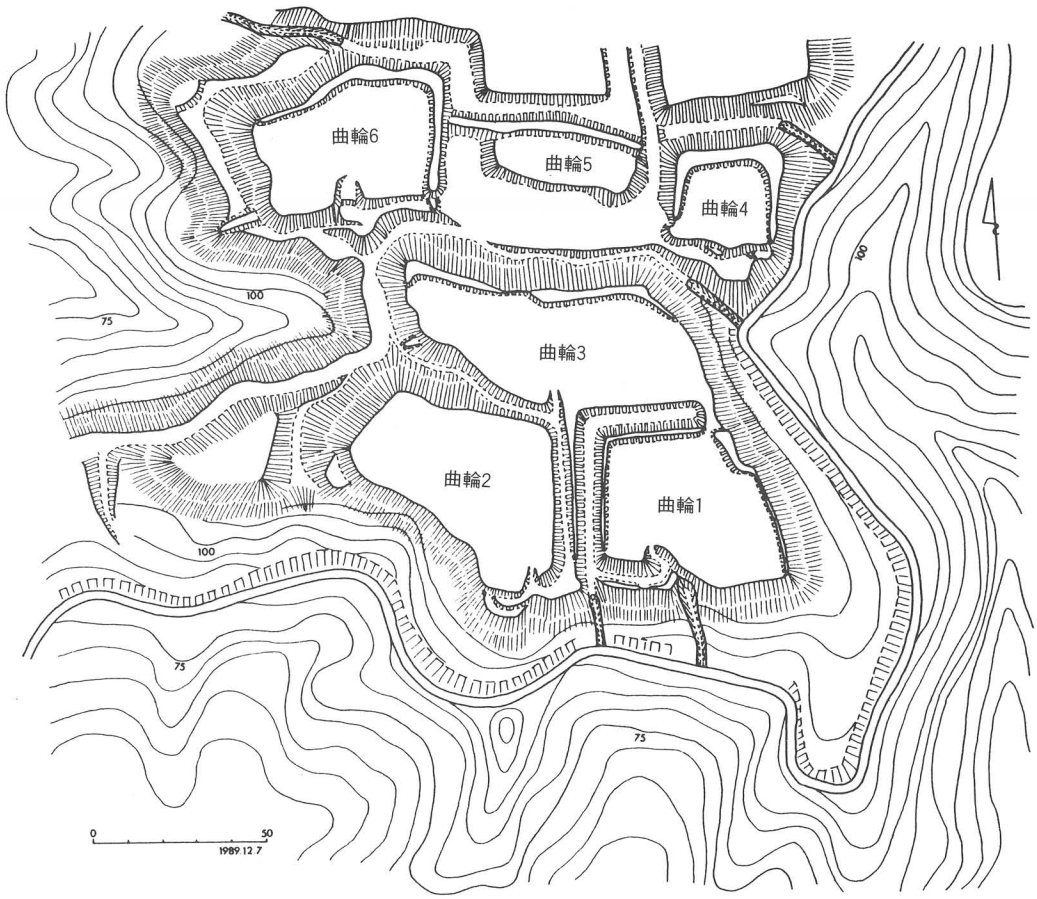
とあり、いずれも３区画のみが記載され、明瞭なほかの曲輪の記載が漏れている。このことについては、『穂北城跡』のなかで北郷氏が「街道」と関連性があり、結果、この道から先端にかけての３区画のみが城とされたのではないかと指摘されている。

ところが、１の曲輪に建立されている記念碑（1933）には、次の碑文が刻まれている。



1．穂北城跡 2．茶臼原古墳群(国指定) 3．千畑古墳(国指定) 4．千畑横穴墓群 5．杉尾横穴墓 6．囲横穴墓
7．上江横穴墓群 8．野竹横穴墓群 9．上穂北古墳群10．尾能古墳11．串木横穴墓群12．串木遺跡13．新立遺跡
14．西都原古墳群(特別史跡)15．山城跡

第13図　遺跡位置図



第14図　穂北城縄張り図

県教育委員会「穂北城跡」1992.3より転載

「上野城跡南穂北川ニ臨ミ断崖二十丈東西ハ渓谷ヲ帯ヒ唯北一隅平原ニ接ス割テ五区トナル其南ナルヲ榎木城ト呼フ東西二十八間南北十五間其中ナルヲ中ノ城ト呼フ東西三十八間南北十九間其東ナルヲ東ノ城西ナルヲ西ノ城ト呼フ方十二間五城ノ間皆壕隍ヲ通シ要害ヲ固クス」

このように、ここでは5区画になっているが、5・6の曲輪をひとつの曲輪として認識した結果によるものと思われる。いずれにしても、文献には記載されてはいないが、興味ある碑文である。

これら記述からすると、「榎ノ木城」が1の曲輪、「中ノ城」が3の曲輪、「東ノ城」が4の曲輪、そして、碑文による「西ノ城」が2の曲輪と推定される。

1の曲輪は、三方に土塁を持ち、南辺には土塁で囲まれた虎口を有している。2の曲輪には土塁は見られず、南辺に虎口を有している。この1と2の曲輪の間には2重の堀が配されている。1の曲輪の堀は深く、2の曲輪の堀は浅い。さらに、2の堀の南端は竪堀として切り落とされている。

3の曲輪は、中央に位置するもので、北辺のみ土塁を有している。また、南東端で1の曲輪と連結している。

4の曲輪は、最も規模の小さい曲輪で、南辺を除く3方に土塁を有している。3と4の間には東西の堀が配されている。

5と6の曲輪は、『穂北城跡』のなかで紹介されたもので、4の曲輪の西側に位置している。5は北辺、6は北辺に「L」字状の土塁を有し、中央部で連結している。6は南辺に虎口を持つ。また、4・5・6の曲輪の北側は、幅広の堀となって台地と区切られ、さらに、その両端は竪堀となっており、防御がより堅固なものになっている。

4と5の曲輪の間は、「大手」にあたる部分になると推定され、南に延びている道は、現道（県道西都－高鍋線）になる以前に利用されていた街道である。

註

1）.『日向地誌』平部岬南　1929

2）.『宮崎縣史蹟調査報告』第5輯　宮崎縣　1930

3）. 北郷泰道・菅付和樹・長友郁子『穂北城跡』　宮崎県教育委員会　1992

第3節．調査の記録

1．遺　　構（第16～19図）

発掘調査は、環境整備工事が行われる部分（南西端の曲輪２）について全面実施する予定であったが、試掘調査の結果、北側部分については遺構検出面がかなり深く、樹根も伐根しない工法に計画変更されたことから、造景工事によって影響を受ける南側（南区）と西側部分（西区）の約1,200㎡が対象となった。（第15図）また、調査は、できるだけ現状のまま保存することが前提であることから、全掘でなく、遺構確認を中心に行った。

調査の結果、南区からは多数のピットをはじめ土坑及び溝状遺構が検出された。（第16図）

ピットは、北側を中心に多数検出されたが、複雑に絡みあっており、掘立柱建物跡を復元するまでには至らなかった。径0.5～1.8mを計る。

土坑は、方形プランのものと長方形プランのものが西側を中心に検出されているが、規模的にも統一性がなく、方向も不規則である。遺物はほとんど出土しておらず、時期は不明で、使用目的も判断が難しい。長軸1.8～3.8m、短軸1.7～3.4m、深さは0.4m前後と浅いものが多い。

西区からも、多数のピット及び土坑が検出されたが、なかでも西側から検出された虎口は注目される。虎口は、西端から東方に向かって直線的に17.0m延びており、最大幅2.0m、深さは入口にあたる西端が3.0mと最も深く、東方に行くにしたがって浅くなり、最終的には台地面と同レベルになっている。また、途中が南方に向かって2.4mほど開口しており、人工的に造られていることは確認できたが、使用目的については不明な点が多く判断がつかない。（第17・18図）

ピットは、東側に集中して多数検出されているが、南区同様複雑に絡みあっており、掘立柱建物跡を復元するに至らなかった。径0.4～1.8mを計る。

土坑は、ピットとは逆に西側に集中している。プランは、方形・長方形及び楕円形のものがあるが、規模的にも様々で、最大のもので長軸3.4m、短軸2.4m、最小のもので長軸1.4m、短軸1.2mを計る。方向も不規則で、深さも0.51～1.47mと様々である。虎口周辺に集中しているが、セクションで見ると、虎口が埋没後後掘られたものであり、虎口に関連したものではないと思われる。貯蔵穴などの使用目的が考えられるが、不明な点が多い。

駐車場部分からは、３条の溝状遺構とピットが検出された。溝状遺構は、１号が現存長8.2m・幅1.6m・深さ0.27m、２号が現存長3.5m・幅1.15m・深さ0.41m、３号が現存長2.75m・幅1.2m・深さ0.34mの２段になっている。いずれも遺物が出土しておらず、時期は不明であるが、遺構の検出状況などから後世のものと推定される。ピットは、まばらで、大型のものはイモアナである。径0.35～0.5m、深さ0.19～0.54mを計る。（第19図）

2．遺　　物（第20～25図）

遺物は、青磁・白滋・染付などの輸入陶磁器類や国産陶磁器をはじめ土師質土器などが出土しているが、特に第２・３トレンチ（試掘）から多量の弥生土器が出土した。そのほか、縄文土器・土錘・古銭、また、磨製石鏃・石包丁・石斧などの石器も出土した。

縄文土器（第20図１）

わずかに１点出土した。屈曲した凹線と縦位の撚糸文が施された塞之神式土器（１）である。縄文時代早期に比定される。

弥生土器（第20・21図２～23）

弥生土器は、試掘の際出土したものであるが、なかでも第２トレンチから重なるようにトレンチ内一面に出土した。

２～５は口縁部が「く」字状を呈した甕で、口唇部が平坦なもの（３）と窪んでいるもの（２）及び丸いもの（４・５）がある。また、頸部に刻目突帯を有しているもの（５）も含まれている。６～９は甕の底部で、平底のもの（６・８）と丸底気味のもの（７）、上げ底で端部が広いているもの（９）に分かれる。

10はわずかに外反した壺の口縁部で、口唇部は平坦、丁寧なヘラ磨き調整が施されている。11は球状に膨らんだ胴上部に最大幅を持つタイプの壺である。12・13は壺の底部で、いずれも平底である。

14は大型で受部と口縁部の境に明瞭な稜線を持ち、口縁部は外反している高坏の坏部である。15は14以上に外反度の大きい高坏の口縁部で、口縁端部が比厚している。16～20は高坏の脚部であるが、16・18は裾部が大きく外反するもので、円孔透かしを有し、端部に特徴を持つ。17～19は裾部があまり外反しないもので、20は円孔透かしを有している。

21・22は上げ底で、端部が広がるミニチュアの鉢である。23は杓子型土器で、長さ8.5cm・最大幅4.8cmを計る。

これらは、いずれも器形の特徴などから弥生時代後期後半に比定される。

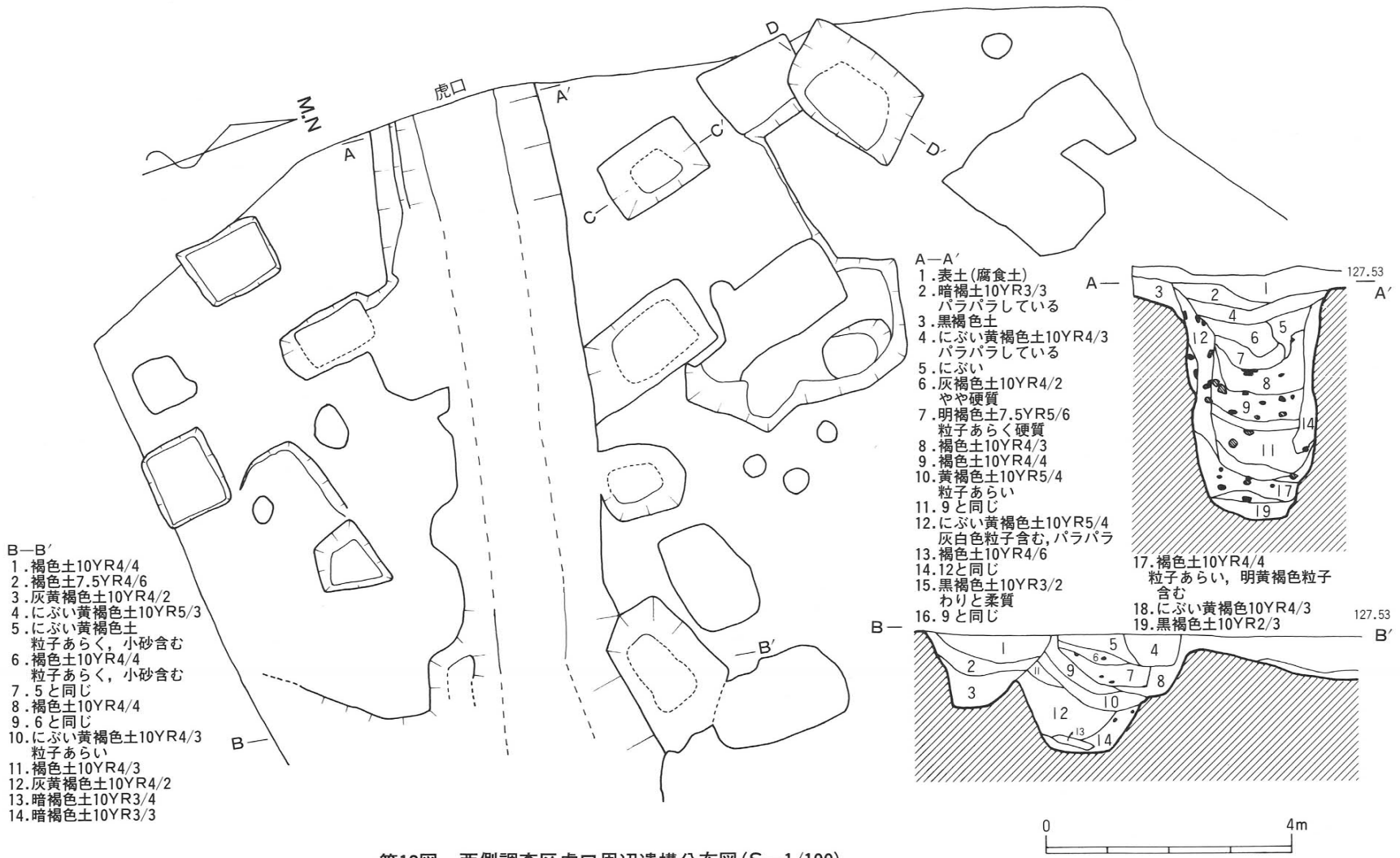
土師質土器（第22図24～33）

24は坏で、底部と体部の境目がなく、体部は内湾しながら口縁部に至り、口唇部は尖っている。25・26はヘラ切り底を有する皿で、体部は直線的に広いている。27～30は底部のみで判断がつきにくいが、皿あるいは坏のものと思われる。いずれも、ヘラ切り底の底部で、体部との境に段を有しているもの（27・29）も含まれる。31は底部と体部の境目に段を有する坏で、体部が直線的に延びている。32・33はわりと器厚が厚く、ヘラ切り底を有する皿で、体部は直線的に広き、口唇部は丸く仕上げられている。

第15図　穂北城跡調査区位置図(S＝1/1,000)

第16図　南側調査区遺構分布図

第17図　西側調査区遺構分布図(S=1/200)



第18図　西側調査区虎口周辺遺構分布図(S=1/100)

三彩盤（第22図34・34'）

平底の底部から、ゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁部は「く」字状を呈しているもので、さらに、口縁端部は内湾している。内面及び見込みには陰刻文が施されている。なお、この三彩盤は、平成元年度県教育委員会によって調査された際にも出土しているが、器形・文様・色調などから同一系統のものと推定される。

染　付（第22図35・36）

35は口縁部が大きく外反した盤で、見込みに竜濤文が描かれている。36は口縁部が内湾し、底部が碁笥底をなす皿で、見込みに吉祥字が描かれている。

青　磁（第22・23図37～42・44・46）

39～40は青磁碗の口縁部で、端反りのもの（40）も含まれている。また、40には蓮弁文が描かれている。41は器種不明、42・46は高台付鉢の底部と思われる。44は端反りの鉢で、見込みに魚と水草が描かれている。

陶磁器（第23図45）

端反りの鉢の口縁部である。

陶　器（第23図47～50）

47は幅広の突帯を有する甕あるいは鉢、48は壺の頸部、49は刻印のある壺の胴上部である。50は器種不明で、平底の底部を有している。

古　銭（第23図51～57）

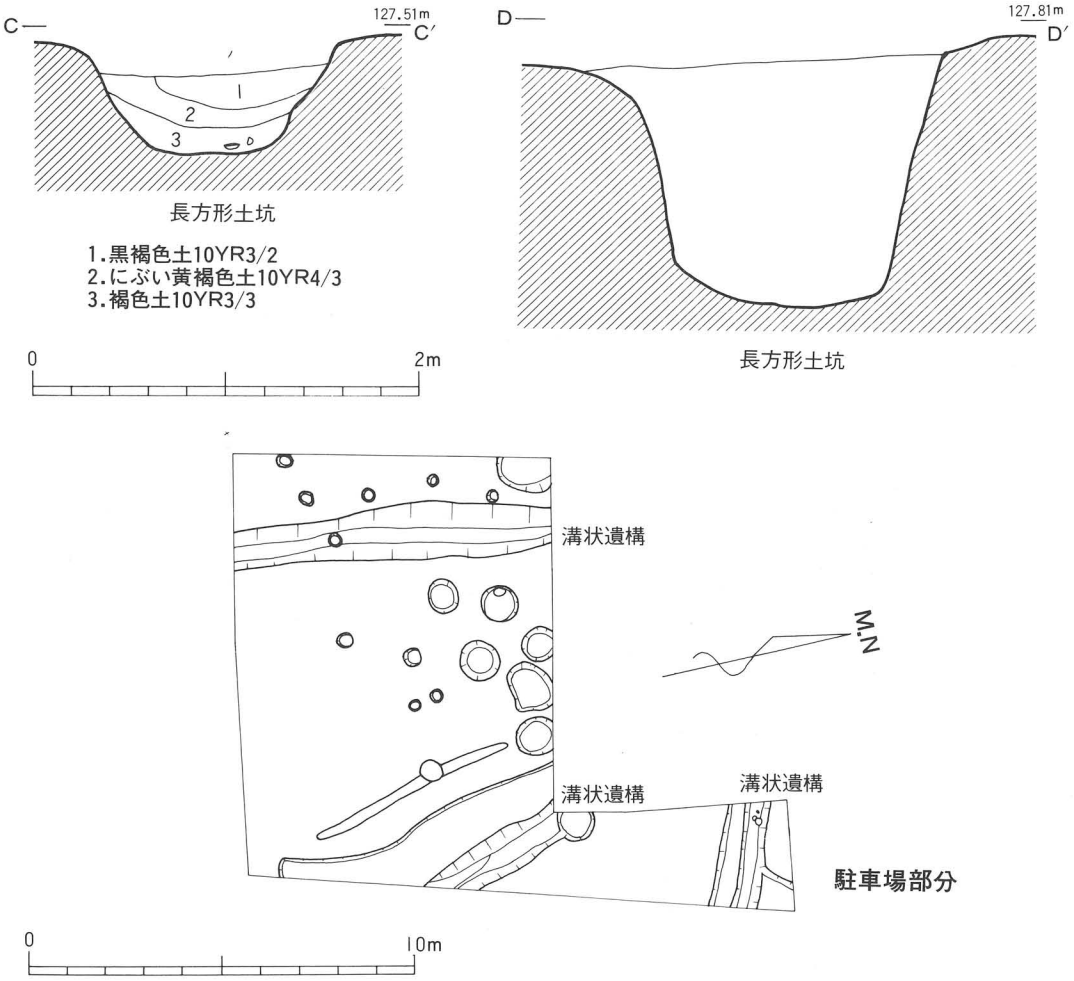
いずれも南区からで、「洪武通宝」が最も多く、その他、「朝鮮通宝」・「大中通宝」が出土している。

土　錘（第24図58～64）

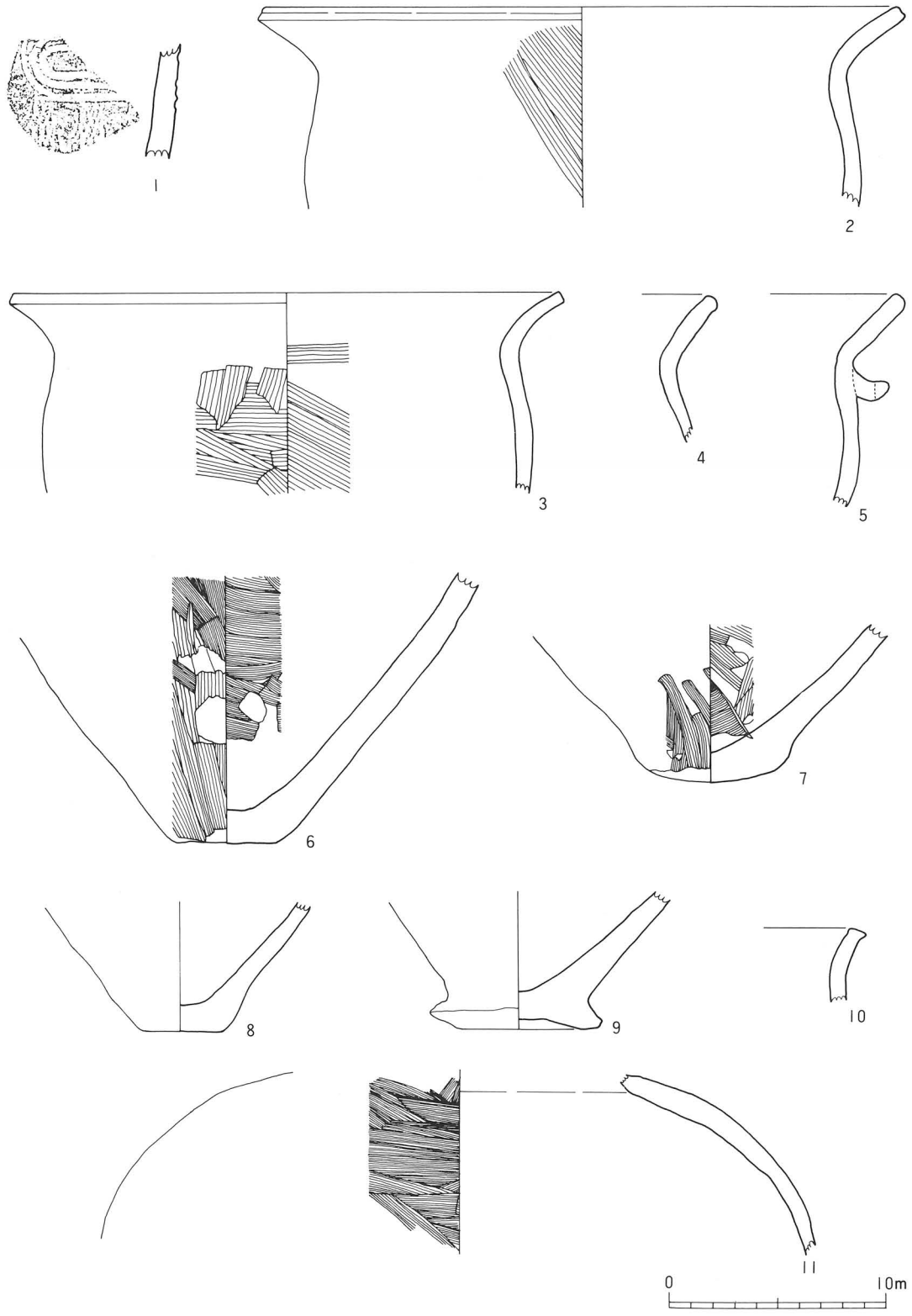
いずれも管状の土錘で、長さ3.7～5.4cm、最大幅1.2～1.75cm、孔径0.4cm前後を計る。胎土は細かく、焼成も良好である。

石　器（第24図65～70）

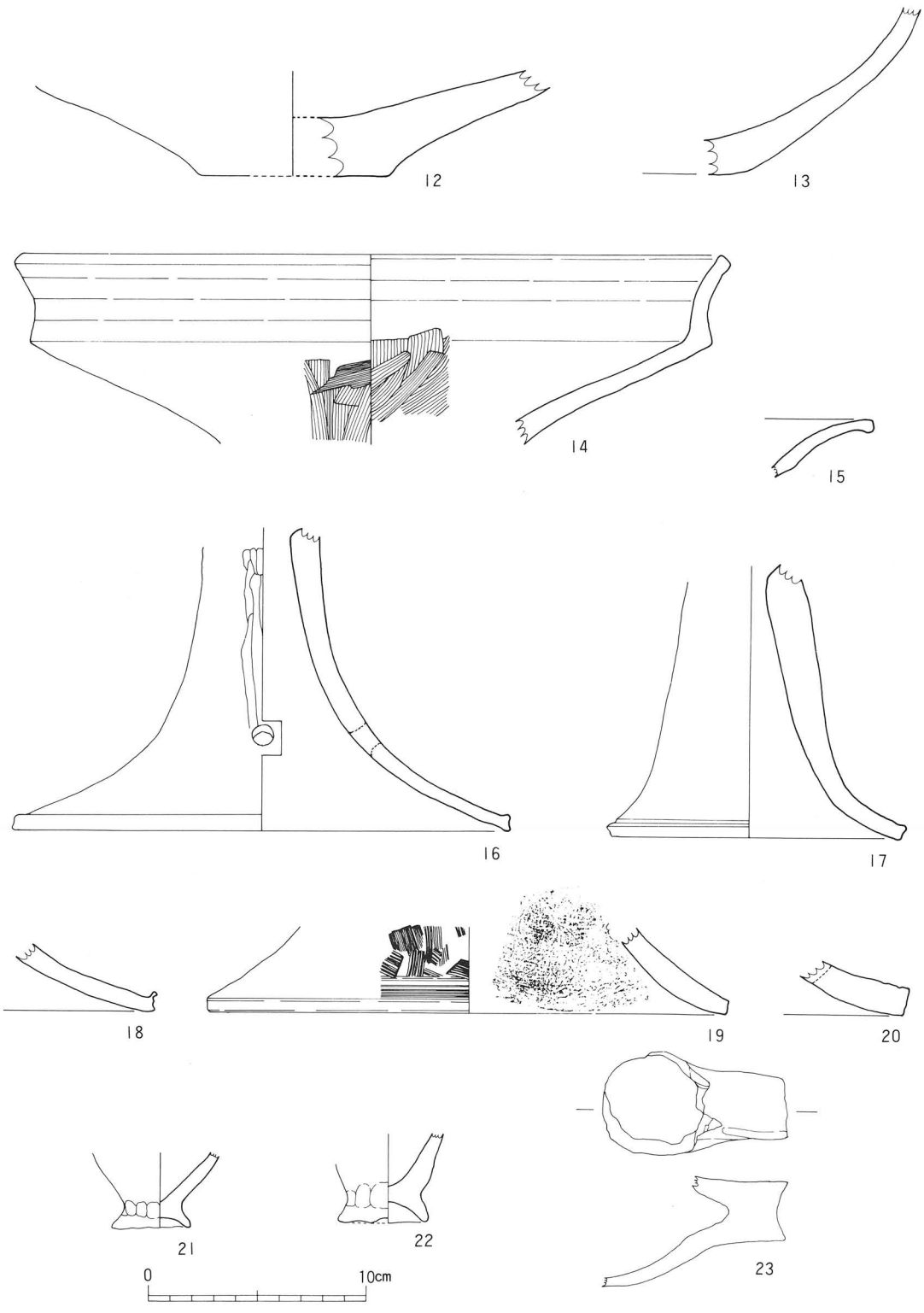
65・66は砲弾型の磨製石鏃で頁岩製、67は半分程が欠損した長方形石包丁で、中央上部に円孔を水平に二つ穿っている。68は長軸側が打ち掻いてある石錘、69は細身の打製石斧、70は蛤刃の磨製石斧である。いずれも頁岩製である。



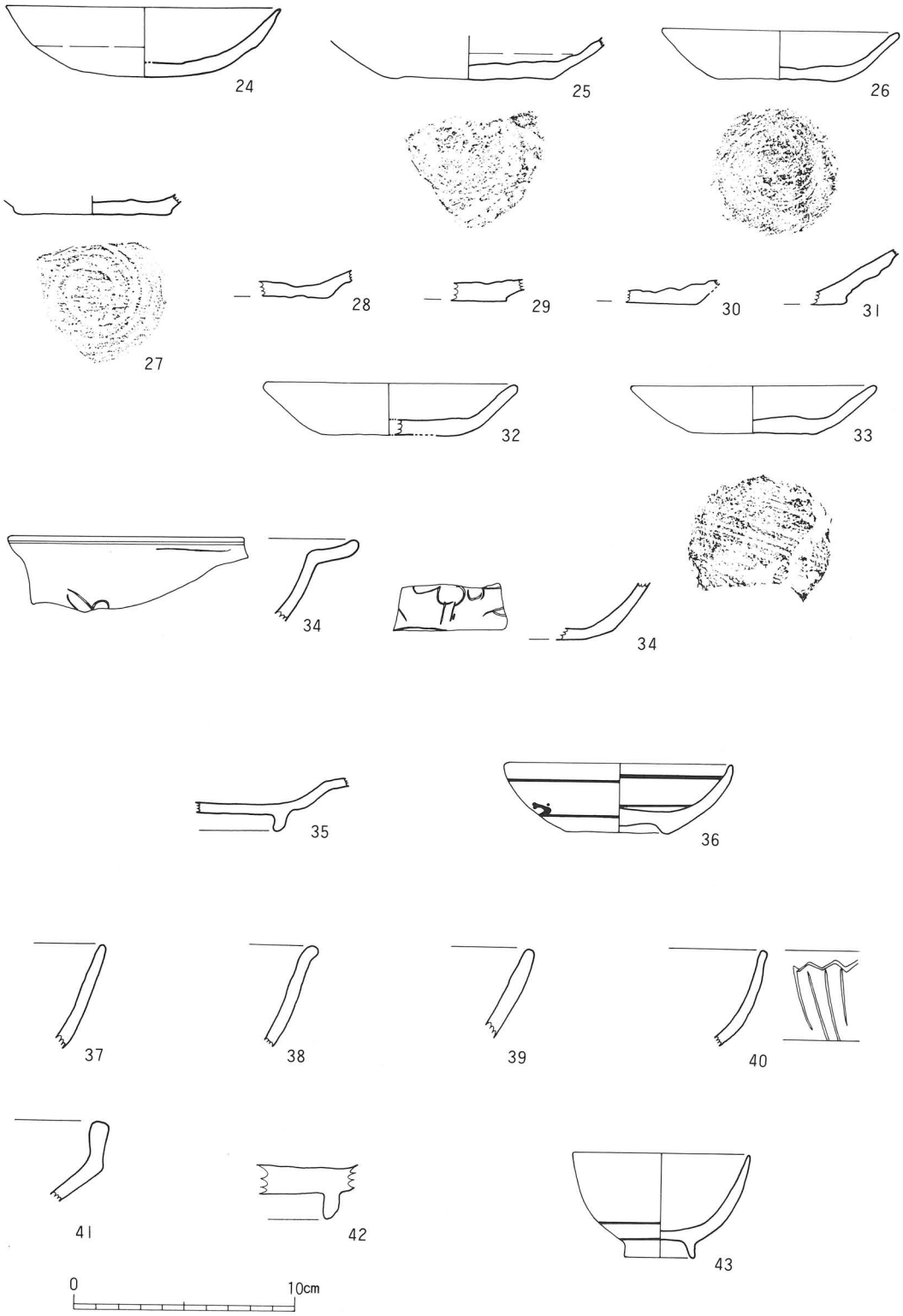
第19図　土坑実測図及び駐車場部分遺構分布図(S=1/40, 1/200)



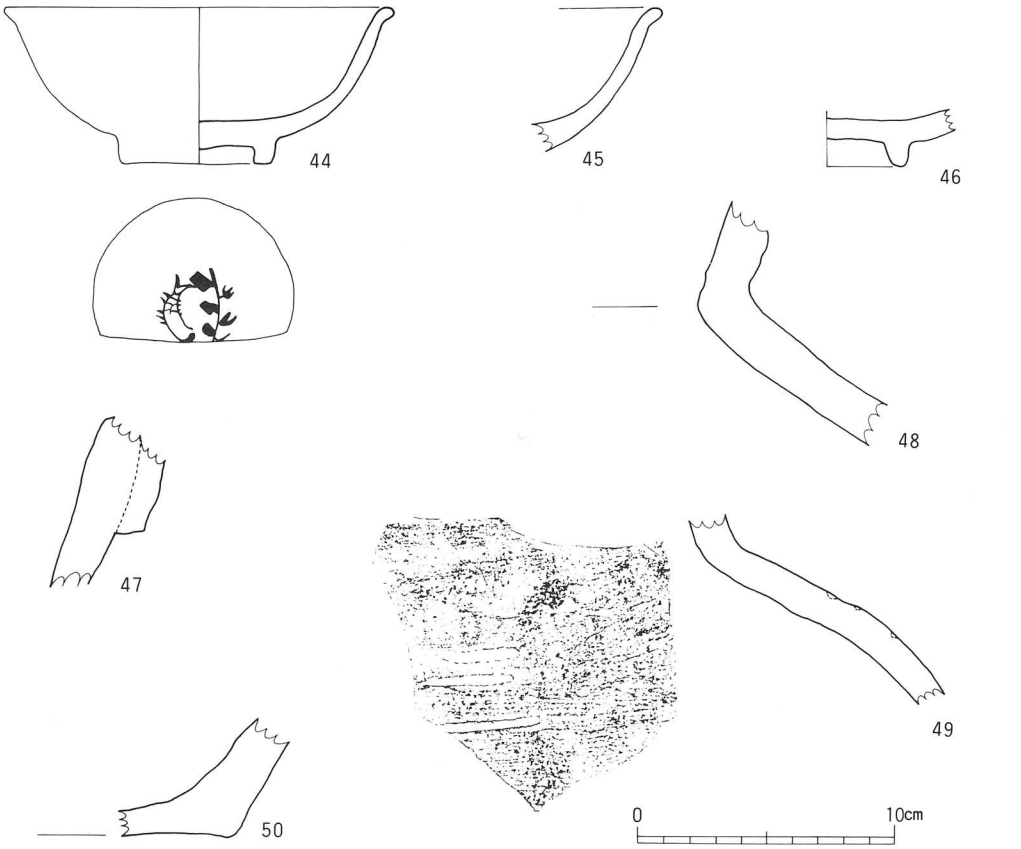
第20図　出土遺物実測図(縄文土器・弥生土器)（S＝1/3)

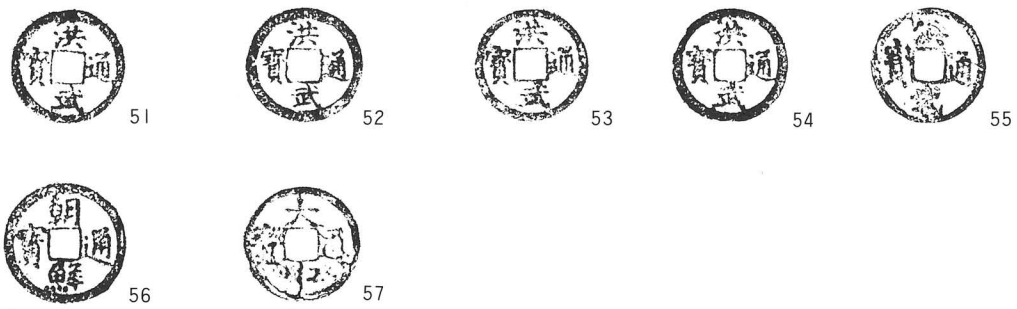


第21図　出土遺物実測図(弥生土器・杓子)　(S=1/3)

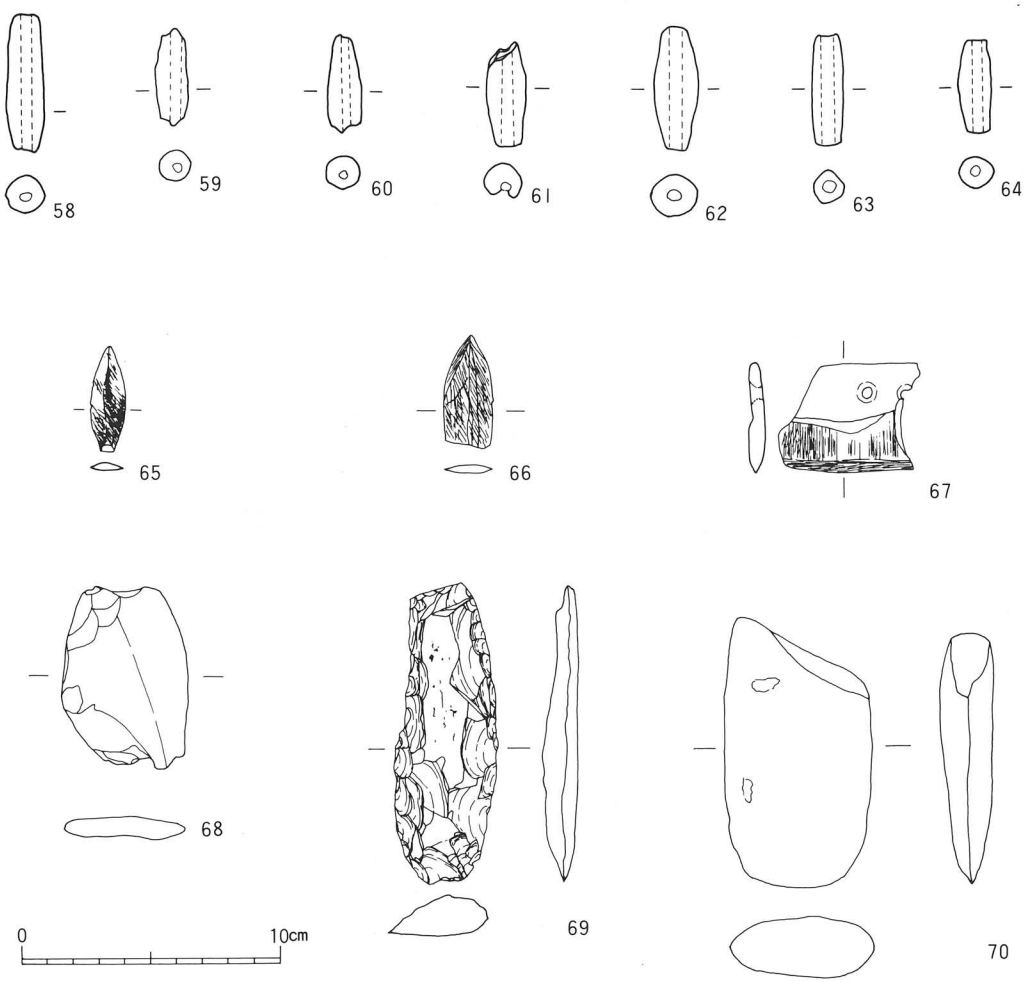


第22図　出土遺物実測図（土師質土器・三彩盤・染付・青磁）（S＝1/3）





第23図　出土遺物実測図(染付・陶磁器・古銭)　(S＝44～50→1/3, 51～59→2/3)



第24図　出土遺物実測図(土錘・石鏃・石包丁・石斧) (S＝1/3)

遺物観察表 (1)

遺物番号	出土地点	種別	器種・部位	法量 (cm)			調整・手法ほか		色調		焼成	胎土の特徴
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	一括	縄文土器	深鉢・胴部	—	—	—	ナデ・撚糸文、凹線文	ナデ	褐	明褐	良好	2㎜以下の白・灰色の砂粒を含む
2	第2トレンチ	弥生土器	甕・口縁～胴部	29.1	—	—	ナナメハケ、全体に煤付着	風化著しい	浅黄橙	灰黄褐	やや不良	2㎜~3㎜の褐・黒色の粒を含む
3	〃	弥生土器	甕・口縁～胴部	25.2	—	—	タテ・ナナメハケ後ナデ	ヨコナデ、ナナメハケ後ナデ	灰白	灰白	良好	2㎜以下の褐・黒色の砂粒多い
4	〃	弥生土器	甕・口縁～胴部	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	浅黄橙	やや不良	2~4㎜の砂粒・灰・黒色の粒
5	〃	弥生土器	甕・口縁～胴部	—	—	—	ヨコナデ、ナナメハケ	ヨコハケ、ナナメハケ	浅黄橙	〃	〃	1~3㎜程の砂粒を多く含む
6	〃	弥生土器	甕・胴～底部	—	4.7	—	タテハケ、ナナメハケ	ナナメハケ	灰白	灰白	良好	2~5㎜の砂粒、灰色の粒含む
7	第3トレンチ	弥生土器	甕・胴～底部	—	6.8	—	ミガキ、ナナメハケ、ナデ	ヨコハケ・ナナメハケ	にぶい橙	褐灰	〃	1~3㎜の砂粒、灰色の粒含む
8	第2トレンチ	弥生土器	甕・胴～底部	—	3.6	—	ナナメハケ後ナデ	風化著しい	灰褐	橙	やや不良	2～4㎜程の砂粒を含む
9	〃	弥生土器	甕・胴～底部	—	6.5	—	風化著しい	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	〃	1～5㎜程の砂粒を含む
10	〃	弥生土器	壷・口縁部	—	—	—	ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	橙	橙	良好	2㎜以下の砂粒を少量含む
11	〃	弥生土器	壷・胴部	—	—	—	タテ・ヨコ・ナナメハケ	ナデ、指頭調整痕	浅黄橙	浅黄橙	〃	3㎜以下の砂粒を含む
12	〃	弥生土器	壷・底部	—	8.6	—	風化著しい	風化著しい	明黄橙	明黄橙	不良	きめ細かい、1㎜程の砂粒含む
13	〃	弥生土器	壷・底部	—	—	—	タテハケ	タテ・ヨコ・ナナメハケ	にぶい褐	にぶい褐	良好	〃
14	〃	弥生土器	高坏・坏部	31.6	—	—	ヨコナデ、タテ・ナナメハケ	タテハケ	浅黄橙	浅黄橙	〃	2~5㎜程の砂粒を含む
15	一括	弥生土器	高坏・口縁部	—	—	—	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	〃	〃	〃	きめ細かい、1㎜程の砂粒を含む
16	第2トレンチ	弥生土器	高坏・脚～裾部	—	22.3	—	ミガキ（風化著しい）	風化著しい	〃	〃	やや不良	1~2㎜の砂粒を多く含む
17	〃	弥生土器	高坏・脚～裾部	—	12.7	—	タテハケ（風化著しい）	ヨコナデ	灰白	浅黄橙	良好	2~4㎜程の砂粒を含む
18	〃	弥生土器	高坏・裾部	—	—	—	ミガキ、ヨコナデ、2条凹線文	ナナメハケ、ヨコナデ	浅黄橙	にぶい橙	〃	2㎜以下の砂粒を少量含む
19	〃	弥生土器	器台・上下不明	(23.6)		—	ヨコハケ後ナナメハケ横ナデ	ヨコナデ、端部の一部に波状文	淡橙	浅黄橙	〃	1 ~2㎜程の砂粒を多く含む
20	〃	弥生土器	器台・裾部	—	—	—	ナナメハケ、ヨコナデ凹線文	ナナメハケ、ミガキ、円孔有り	橙	橙	〃	1~3㎜程の砂粒を含む
21	〃	弥生土器	小形甕・胴～底部	—	3.6	—	ナデ、指頭調整痕	ナデ	浅黄橙	灰白	〃	2~5㎜の砂粒、金色の粒含む
22	〃	弥生土器	小形甕・胴～底部	—	4.1	—	ナデ、指頭調整痕	ナデ	〃	〃	〃	2~5㎜の砂粒、灰色の粒を含む
23	〃	弥生土器	杓子形土器	—	—	—	風化著しい	風化著しい	〃	灰	やや不良	2~4㎜程の砂粒を多く含む
24	ピット	土師質	坏・完形品	12.4	4.0	3.2	風化著しい	風化著しい	〃	浅黄橙	不良	きめ細かい、1㎜以下の砂粒含む
25	〃	土師質	皿・底部	—	7.5	—	風化著しい、底部ヘラ切り	風化著しい	〃	〃	〃	〃
26	〃	土師質	皿・完形品	10.8	5.8	2.3	ヨコナデ、底部ヘラ切り	ナデ	〃	〃	やや不良	〃
27	虎口	土師質	皿・底部	—	6.5	—	ヨコナデ、底部ヘラ切り	ヨコナデ	〃	〃	〃	〃
28	虎口西	土師質	皿・底部	—	—	—	風化著しい、底部ヘラ切り	風化著しい	〃	〃	不良	〃

遺物観察表 (2)

遺物番号	出土地点	種別	器種・部位	法量 (cm)			調整・手法ほか		色調		焼成	胎土の特徴
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
29	虎口西	土師器	皿・底部	—	—	—	ヨコナデ、底部ヘラ切り	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好	1～2㎜程の砂粒を含む
30	〃	土師器	皿・底部	—	—	—	ヨコナデ、底部ヘラ切り	ヨコナデ	〃	〃	〃	〃
31	〃	土師器	碗・底部	—	—	—	ヨコナデ、底部ヘラ切り	ヨコナデ	〃	〃	〃	〃
32	一括	土師器	皿・ほぼ完形品	12.0	6.2	2.4	ヨコナデ	ヨコナデ	〃	〃	やや不良	きめ細かい、1㎜以下の砂粒含む
33	〃	土師器	皿・完形品	11.0	5.6	2.2	ヨコナデ、底部ヘラ切り	ナデ、ヨコナデ	〃	〃	〃	〃
34	第2トレンチ	三彩盤？	盤・口縁部、底部	—	—	—						
35	ピット	染付(青花)	盤・底部	—	—	—	竜濤文有り					
36	〃	染付(肥前)	皿・ほぼ完形品	10.2	5.7	3.2		底中心部に「齋」の字有り				
37	虎口	青磁	碗・口縁部	—	—	—						
38	西側区長方形土杭	青磁	碗・口縁部	—	—	—						
39	第2トレンチ	青磁	碗・口縁部	—	—	—						
40	虎口	青磁	碗・口縁部	—	—	—	蓮弁文有り					
41	第2トレンチ	青磁	不明・口縁部	—	—	—						
42	虎口西	青磁	瓶？・底部	—	—	—						
43	第2トレンチ	陶磁器	碗・ほぼ完形品	3.2	4.1	4.8						
44	ピット	青磁	鉢・ほぼ完形品	14.8	5.6	6.2		底中心部に魚形文と唐草状文				
45	虎口西	陶磁器	鉢・口縁～底部	—	—	—						
46	第2トレンチ	陶磁器	瓶？・底部	—	5.8	—						
47	一括	陶器	不明・口縁部	—	—	—	備前焼					
48	第2トレンチ	陶器	壺・頸～胴部	—	—	—	備前焼					
49	ピット	陶器	壺・胴部	—	—	—	刻印あり					
50	虎口	陶器	擂鉢・底部	—	—	—	備前焼					

第4節. ま と め

日 高 正 晴

穂北城跡は、三納城跡と同様『日向記』および『日向纂記』に記載の伊東家48城の中の一城であるが、永禄年間、この穂北城跡には、長倉洞雲斎が居城していた。

時に、伊東氏主従の豊後落ちに際しては、城主の洞雲斎は、嫡男藤七郎を花園原まで迎えに行かせて、一行百余人を穂北城に受け入れ、一泊の後、無事、米良方面に出立させた忠臣として今だにその名は語り継がれている。

ところで、この穂北城跡の縄張り区画の呼称については、明確になっていないところもあるので、以下、そのことについて述べてみたい。まず、この穂北城跡の縄張りについては、『日向地誌』の中で三区に分けて、南に、東西二八間、南北一九間の「榎ノ木城」、次に、東西三八間、南北一九間の「中ノ城」、それに方一二、三間の「東ノ城」の三区画をもって説明されている。

また、この穂北城跡については、先年、県教育委員会によって[(1)]発掘調査が実施され、その際、この城跡についての縄張り図が作成されている。それによると、穂北城跡の曲輪は、六区画から構成されている。そして、南の方から北の方向へ、順次1の曲輪から6の曲輪まで存在していたことが確認できるのである。そして、『日向地誌』に記されているように、榎ノ木城、中ノ城、東ノ城の三城を、この県教委の縄張り図に引きあててみると、立地、規模の観点から、榎ノ木城が1の曲輪、中ノ城が2の曲輪、それに東ノ城が4の曲輪ということになる。

それから、さらに昭和八年に建立された記念碑の碑文によると、以上の三曲輪のほかに、東ノ城に相対して西ノ城のことが刻まれている。そうすると、西ノ城は、おそらく6の曲輪であると推定できる。この石碑については、地元、上野集落の人びとによって建てられたものと思われるが、その際、ほかの文献には、全く記されていない西ノ城のことについては、その土地に残されていた記録、あるいは穂北城跡に関しての民間伝承の中などに、その呼称が伝わっていたのかもしれない。

いずれにしても、穂北城跡縄張り区画としての曲輪のうち1、3、4、6の四曲輪は保塁としての固有名が記されていることになるが、それでは残りの2と5の両曲輪については、どのように考察したらよいか、私見を述べてみたいと思う。先ず、曲輪2についてである。この穂北城跡は、北方が正面になっており、最南端の榎ノ木城（曲輪1）が、防御的本陣として築城されている。それで土塁も北の方へ対しての保塁ということになる。そして1の曲輪の北側から西側にかけては深い堀が巡らされているが、また、中心的な虎口も、この曲輪1の南側に造られている。なお、その付近には竪堀も二ヶ所に設けられてある。すなわち、

搦手（からめて）としての備えを施したものと思われる。

そこで、曲輪２については、どのように考えたらよいだろうか、まず、この曲輪２には、全く土塁が存在していないということである。そして堀の深さも浅く、虎口も曲輪１と連携がとれるように木橋を架けたのではないかと推測される。そして、館なども建てられていたのかもしれない。そのように推察してくると、この曲輪２は、本陣として榎ノ木城に付属した曲輪であり、広義に解釈すると、榎ノ木城の中に含むこともできるのではないかと思われる。

それでは、曲輪５は、どのように考察したらよいだろうか。この穂北城跡は、前面に曲輪４の東ノ城と曲輪６の西ノ城の中間に曲輪５が構築されている。この3ヶ所の曲輪の前の部分には、堅固な空堀が造られ、それぞれの曲輪には土塁も築かれている。このように考えてくると、曲輪５は、東ノ城と西ノ城の両曲輪の中間にあって、脇曲輪的存在として三曲輪の共同防御の一拠点的役割を果たしていたのではないかと思われる。

註

（１）宮崎県教育委員会「穂北城跡」『県道杉安・高鍋線道路改良工事関係発掘調査報告書』1992年3月

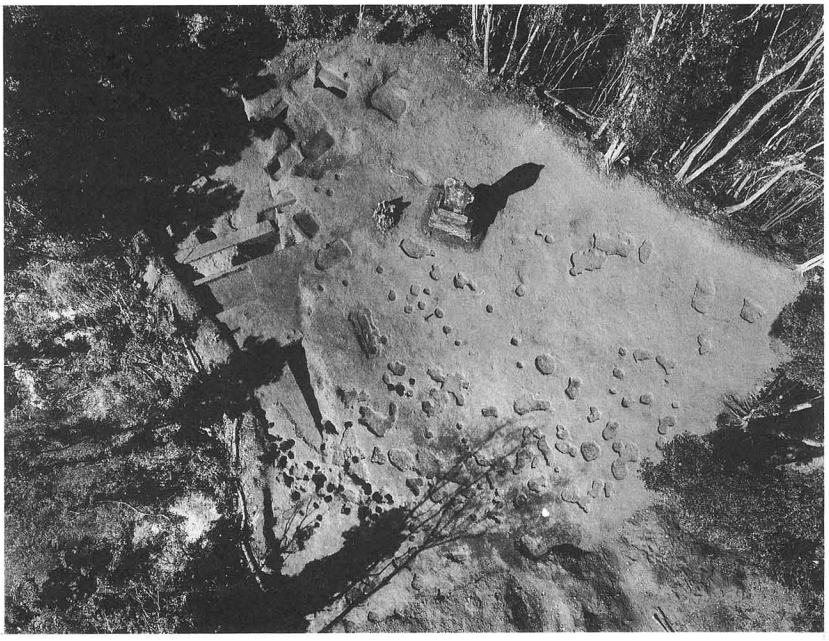
図 版1

穂北城跡（真上）

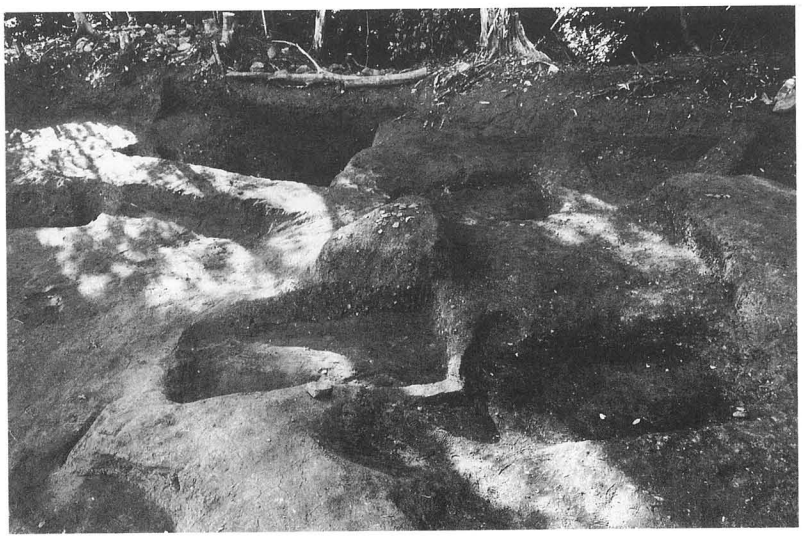
西区遺構検出状況

図 版 2

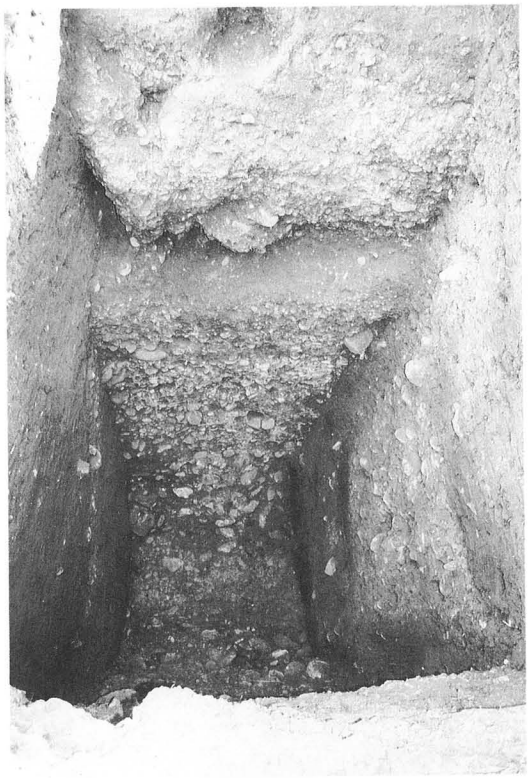
南区遺構分布状況



西区遺構分布状況



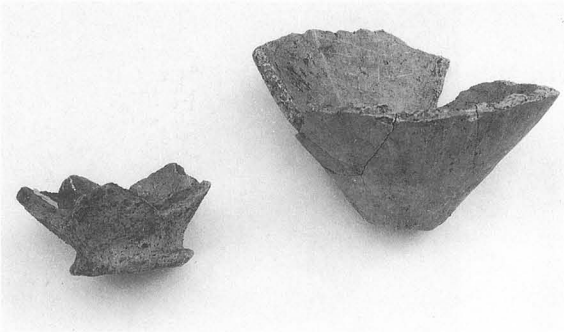
西区土坑分布状況



西区虎口入口検出状況

図 版 4

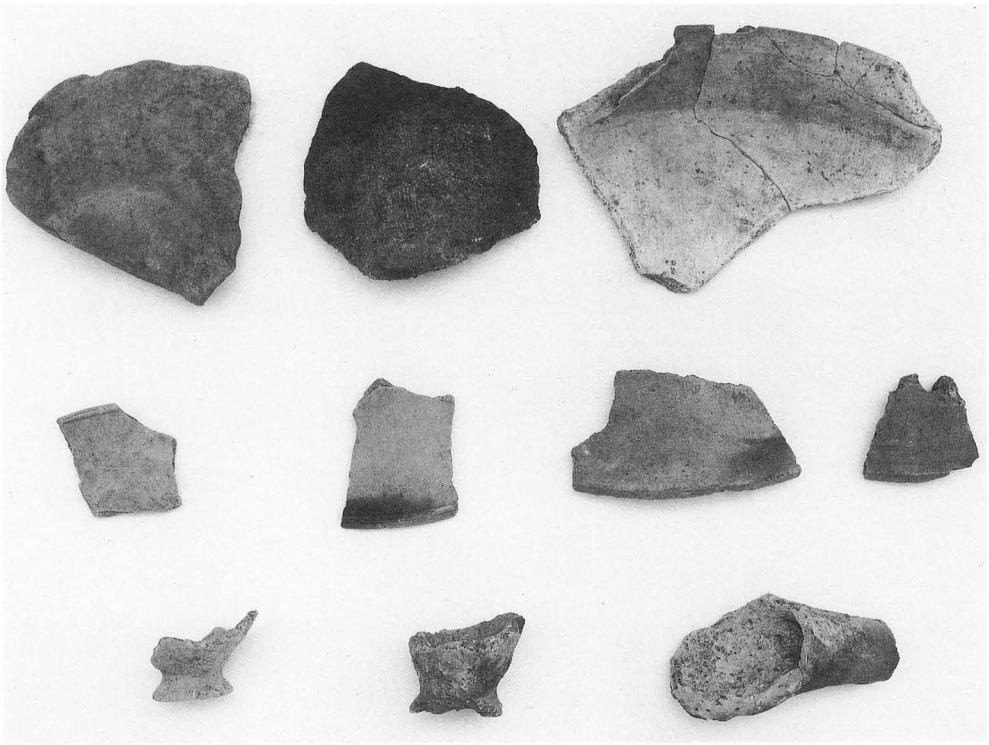
出土土器（縄文土器）



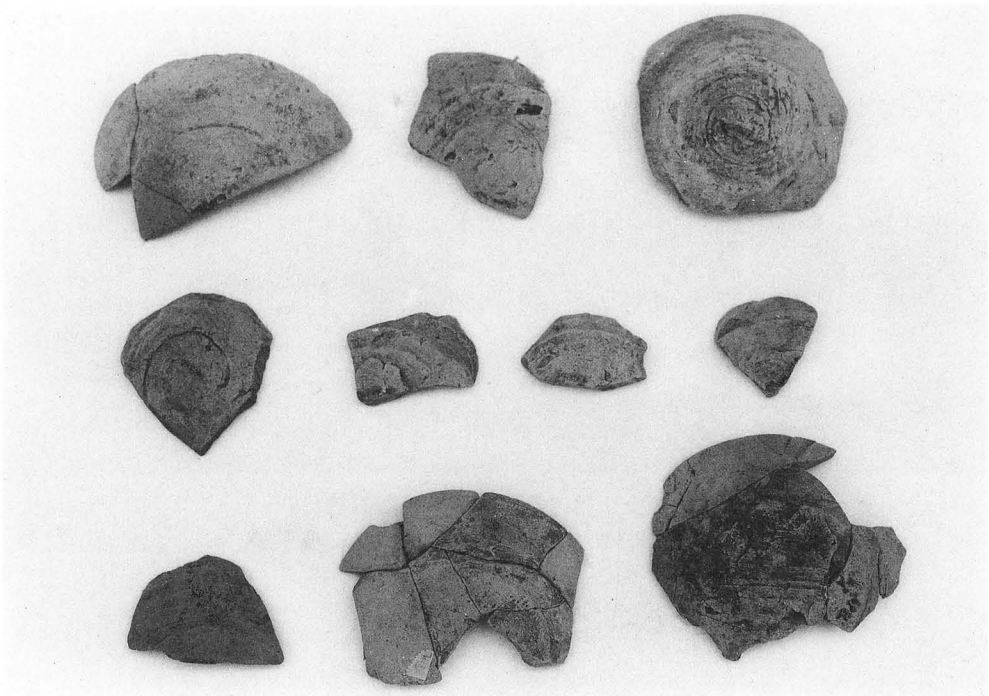
出土土器（弥生土器(1)）

出土土器（弥生土器(2)）

出土土器（弥生土器(3)）



出土土器（弥生土器(4)）

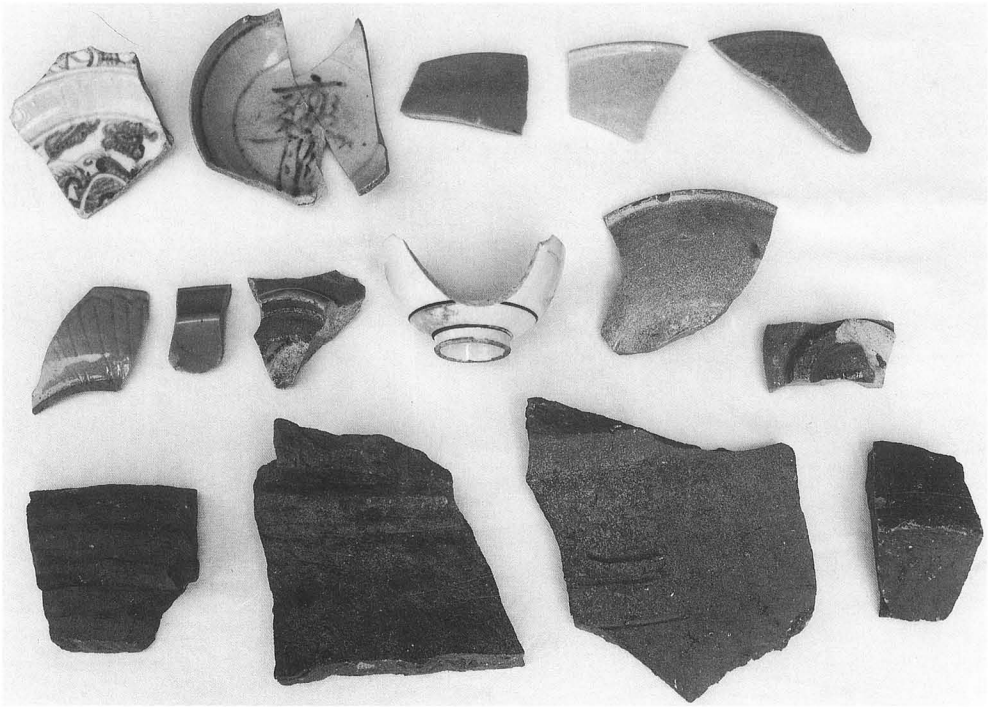


出土土器（土師質土器）

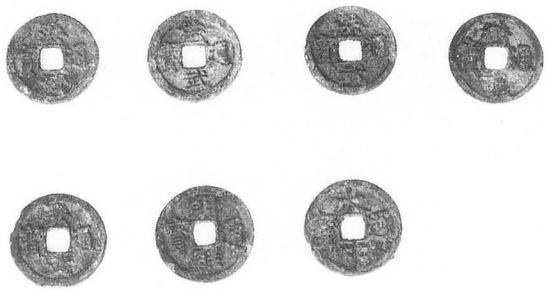
図 版6

出土土器（三彩盤）

出土土器（陶磁器）



出土土器（染付・青磁・陶磁器）



古　銭

土錘・石器（磨製石錘・石包丁・石錘・石斧）

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
三納城跡・穂北城跡
平成8年3月発行
編集発行　西都市教育委員会
印 刷 所　なかむら印刷所